

第三章、日本における韻文の歴史と芭蕉の文学史的位

第一節、韻文の歴史

(一)、歌謡の古体

歌謡の始まりは叫び声にも近いような単純なものであり、民衆の共同生活の中から生み出された。一定の律²⁶をもって楽器の伴奏に合わせて歌われ、唱えられる韻文は、文学史では歌謡と呼ばれている。歌詞と音楽のほかに、多くは舞踊があり、歌の文化が成熟するまでは、人々は、一緒に歌ったり、踊ったりし、個人の分離がない生活を営んでいた。そして、身分や階級の差別もなく、一般的な共通の観念や感情だけであって、個人的な主張性があまり見られないことが特色であった。それは、民謡の起源を見ると分かる。民族の生活の中で、文字を持つ前から民衆が共同で作業し、共同で神祭をした。その時、かれらは口から歌声を流し、かれらの共同意識が高められ、共同の生活が支えられたのであろう。初めは、歌声というのは叫び声にも近いような単純なものであったろうが、共同生活の場において、繰り返されることによって、次第に発達して、歌の形が作られた。その後、民衆に最も親しい存在になり、折りに触れて歌われていたと思われる。そういうことから民謡は民衆の生活に深く根付いていることが想像できる。このことは上代の文献に残された民謡の遺産から推察できる。長い時代にわたって、生み出された民謡は豊富な内容形式を持ち、多様性も持っていたものである。

(二)、古典歌謡—上代から室町時代に

定型が完成する以前の和歌は上代歌謡と呼ばれる。民謡の発達には共同社会のさまざまな集団行事などが大きな役割を果たした。季節行事としての歌垣が、春と秋に、山で行われ、男女の唱和を中心に歌謡を発達させる大きな契機となった。

古い時代から歌舞と結びつき、あるいは様々な行事と結びついて伝承された歌謡は氏族の間で説話の形になり、歌物語として、広く地方民間に伝えられた。その伝えられた歌謡は大和朝廷²⁷による国家統一と、その政治の進展につれて、宮廷儀礼を通じて中央に流れ入った。変化を受けながら宮廷の大歌として演奏されたと考えられる。『古事記』や『日本書紀』に載る歌謡は宮廷の大歌が素材となっているものが多いと想像される。更に、平安初期の古歌謡の歌曲名と歌詞に、古事記の歌謡と一致する歌曲などがある。上代の『古事記』・『日本書紀』・『風土記』や、『万葉集』の中にも、多くの歌謡が含まれている。上代歌謡の代表的なものは『古事記』『日本書紀』にある約二百四十一首の歌謡であり、それらは「記紀歌謡」と呼ばれる。

²⁶律音階のこと、日本の伝統的な音階の一つ。

²⁷日本最初の統一政権、4世紀の中頃、近畿地方に成立された。

記紀歌謡は、独立した歌だけではなく、様々な神話や伝説と結びついているものが多い。記紀歌謡には、色々な性質のものがあり、時代的にも様々なものが含まれ、歌の形は、不定形律から徐々に五七の定型律の方向に進み、後に、長歌や短歌の形式が確立されるものとなった。しかし、伝えられてきた未定の形式の記紀歌謡が短歌の道を開いたことは想像されるが、表現内容及び形式は一致していない。歌謡の内容と形式が深く考えることによって記紀歌謡の底まで触れることができると思う。

● 『万葉集』

『万葉集』は、七世紀前半から八世紀中頃に至る約 130 年間の、天皇、貴族から下級官人防人など様々な身分の人間が詠んだ約 4500 首の歌を二〇巻に収め、成立した。舒明天皇²⁸から 130 年間の時代の歌は万葉集に収まっているが、歌風によって、四期に分かれる。この時期は歌風の大幅の変革が見られた。歌は伝説から分離し、抒情詩として確立した。

万葉集の四期は下記のようにまとめられる。

第一期、舒明天皇 629 年から壬申の乱²⁹ (672 年) までの約五十年間の期間を第一期と呼ばれている。この時期は天皇を中心の行事や出来事が詠まれ、歌は伝説から離れ、抒情詩の形式になり、自然環境も歌の素材となったのである。そして、和歌が独立してきた。第一期の代表的な作者として舒明天皇や歌人の額田王³⁰などがよく知られている。

第二期、壬申の乱が終わった時代であり、古代国家も確立した時代から奈良遷都 (710) までの約四十年間の期間は第二期と呼ばれている。この時期の特徴は長歌が完成したことである。この時期の代表的な作者には、柿本人麻呂と高市黒人がいる。人麻呂は宮中の歌人として活躍し、その作は長編で、一方、黒人は短歌が多かった。両者とも同時代の歌人であったが、黒人は人麻呂と違って独自性の強い歌が特徴である。他の主な作者に大伴旅人・長奥麻呂などがいる。

第三期、奈良遷都以降から天平五年 (733) までの約二十年の期間は万葉集の第三期と呼ばれる。この時期、貴族の間に政治的陰謀が渦巻く、社会不安の時代でもあった。けれども、この混乱の社会の中でも漢学の教養を受けた知識人などが生まれ、批判的、内省的な方向に分化した個性が現れてきた。こうした中で、山部赤人は自然の美を描き、山上憶良は、社会の矛盾や、生活の苦難を歌の素材として歌の世界に取りあげた。高橋虫麻呂は伝説に取材し、浪漫的な心情を導入した。

第四期、天平六年から天平宝字三年 (759) までの二十五年間の時期は第四期と呼ばれる。この時期の主な歌人の大伴家持は大伴旅人の子として名門大伴家を継ぎ、自家の勢力を回

²⁸ じよめいてんのうー第 43 代天皇 593 年から 641 年

²⁹ じんしんのらんとは日本古代最大の内乱である。

³⁰ ぬかたのおおきみは日本の代表的な女流万葉歌人である。

復しようとしたが、藤原家と他の新興勢力に負け、悲劇的な政治生活を送った。他に大伴坂上郎女も『万葉集』の代表的歌人であり、『万葉集』には長歌・短歌合わせて84首が収録されている。

歌体からみると、『万葉集』の場合は、その初期に五音・七音の句はほぼ定着しようとしており、五・七を重ねて、最後に七で留めて長歌、五・七・七の片歌、五・七・七・五・七・七の旋頭歌、五・七・五・七・七・七の仏足石歌体歌などがあるが、五・七・五・七・七の短歌形式が時代の進行とともに多数を占めるようになる。

● 平安・鎌倉・室町時代の歌謡

平安時代には人々の間に流行した歌謡が宮廷の中にも入り込み、古代における「大歌」つまり儀礼歌が宮中で演奏され、歌われた。けれども風俗として見られた東国の歌は宮廷から分離され、十一世紀後半から「今様」に代わって行った。

今様は宗教を中心とする歌で、人間生活における様々なものを素材とした流行歌謡のことである。今様は十二世紀後半に後白河天皇によって『梁塵秘抄』に収集されたものである。今様は傀儡子や、遊女などの専門芸能者が歌ったり、舞ったりして流行し、貴族の遊宴まで欠かせない芸能となった当代の新しい歌だった。「今様」の多くの音数律は四・四・五であり、素材は幅広く、恋愛や無常または仏縁もあった。鎌倉初期には武士や白拍子も今様に近づき、親しんで歌ったようだが、やがて今様はその位置を失い、『徒然草』に出て以来、明治末年まで見えなかった。

宴曲は「早歌」とも言われ、鎌倉中期から室町時代にかけて、貴族・武家・僧侶の間で流行した歌謡の一つである。法師（説経師）になろうとする者が仏事後の酒宴などのために「早歌」を習ったという説もある。内容は物づくし、道行きの歌で、多くは七五調で作られている。十三世紀後半から十六世紀に東国で広く行われた歌謡である。

『閑吟集』は室町後期の歌謡集であり、鎌倉末期から室町時代にかけて、武家を中心に貴族、僧侶などの間に流行した宴席のうたいものなどを合わせて、311首が収録されている。全一卷で編者は未詳だが、連歌師の宗長が編集したという説もある。『閑吟集』は宴曲あるいは歌謡も含み込みつつ、小歌を中心に編纂されており、宴曲後の歌謡の様相を示している。

「小歌」とは、平安時代の宮廷行事で、男声の大歌に和して歌った女官の歌であり、また、女声歌謡の一般をも指したものである。本来的には、「大歌」に対応するもので、民間で行われた俗謡を意味したが、『閑吟集』の小歌は大方、四句からなる短い歌詞の歌謡を言う。宴曲が仏教あるいは儒教を基調にして古典世界に典拠を求め、比較的長い歌詞から成るのに対し、小歌は、恋愛を中心として当時の民衆の生活や感情を表現したものが多く、江戸歌謡の基礎ともなった。

- 宮廷文学以前

貴族の生活には文学は直接的には影響を与えるものではなく、和歌はそのまま詠まれるものではなかったが、勅撰が変化のきっかけとなった。民間の生活に繰り返された伝統になることによって、男女交会の道具として詠まれ、また謡物として歌われ続けたのである。そうして和歌はやがて十世紀の初めに古今和歌集が編纂されるに至って、宮廷文学として繁栄したのである。そして、和歌が繁栄する条件として重要なことは、男子の漢詩文の世界に対する、平仮名の発達である。仮名文字が普及によって文化の一環になり、宮廷文学に大きな影響を与えた。

- 『勅撰和歌集』の時代

『勅撰和歌集』は、延喜五年（905年）、天皇の命令によって編集された『古今和歌集』に始まり、『新続古今和歌集』までの534年間で21集がある。

二十巻の『古今和歌集』は最初の勅撰和歌集で、醍醐天皇の命令によって編集された。主な撰者は紀貫之を初め、凡河内躬恒、壬生忠岑、紀友則であった。彼らは千百首の和歌を集め、二十巻に分類した。分類としては春歌上・下（巻一、二）夏歌（巻三）、秋歌上・下（巻四、五）、冬歌（巻六）、賀歌（巻七）、離別歌（巻八）、羈旅歌（巻九）、物名歌（巻一〇）、恋歌（巻一〇一～一五）、哀傷歌（巻一六）、雑歌上・下（巻一七、一八）、雑体歌・俳諧歌（巻一九）、大歌所御歌（巻二〇）である。『万葉集』から『古今和歌集』の時代までは約百五十年間の開きがあるので、歌風の変革があった。音数律は五七調から七五調に変えられ、題材も限定されるようになった。こうして、和歌は宮廷文学の中心として発達してきた。代表的歌人としては、紀貫之、素性法師などが有名であり、また女性歌人の伊勢を合わせて、作者数は122人であるが、四割の歌の作者は、「読み人知らず」である。幅広く集められたことが、その歌集の価値を高めているのだといえる。

- 『後撰和歌集』

『後撰和歌集』は村上天皇の下命によって編纂された。後撰和歌集は二番目の勅撰和歌集であるが、古今集のような序文が付いていないため、その成立年時は不明である。後撰和歌集は二十巻であり、個別すると、春（上・中・下）、夏、秋（上・中・下）、冬、恋（六巻）、雑歌（四巻）、離別、賀歌であり、総歌数は1425首である。この勅撰の特徴として、贈答歌が多く、そして詞書も長く書かれている。代表的な作者としては紀貫之と伊勢がいて、他には貴族たちの歌も多く入っている。

- 『拾遺和歌集』

『拾遺和歌集』は第三番目の勅撰和歌集であり、この和歌集にある歌物語が流行し、後の散文の日記や物語に大きな影響を与えた。拾遺和歌集は十一世紀の初期、花山天皇によって

編纂された。花山天皇は和歌をもって君臣和楽を志し、歌合・屏風歌に描かれた四季の物事や山水などの絵を題にして詠んだ歌が盛んになった。拾遺和歌集は二〇巻構成で、紀貫之（107首）、柿本人麻呂（104首）などの歌が集められている。

- 『後拾遺和歌集』

『後拾遺和歌集』は白河天皇の下命によって撰集作業が始まり、1086年頃に完成された第四代勅撰集である。撰者の藤原通俊は白河天皇の側近として政治的にも力を振った。そして、和歌の世界でも歌合の復活に努めた。10世紀末から11世紀前半にかけては、藤原道長を中心とした藤原摂関政治の下に、後宮文化が花開いた時代であることが知られている。後宮文化を女房として支えた清少納言・紫式部・赤染衛門・和泉式部などの女流歌人・作家が輩出した時代である。こうした女房と公家たちとの交渉が多くの和歌を生み、様々な散文の素材ともなった。『後拾遺和歌集』の主な歌人は和泉式部（67首）、赤染衛門（32首）、能因法師（31首）である。全体として現実的、客観的な傾向を持ち、清新の歌風が著しくなった。

- 『金葉和歌集』

『金葉和歌集』は『後拾遺和歌集』が成立して約40年後の12世紀前半に編纂される。『金葉和歌集』は白河天皇の二番目の撰集であり、今までの勅撰集が二〇巻構成であったのに対し、この撰集は一〇巻構成とほぼ半分の規模である。構成は春・夏・秋・冬、賀歌、離別、恋（上・下）、雑歌（上・下）の十巻である。そして、十巻の構成の勅撰集は、この『金葉集』と次の『詞花集』しかない。撰者たちの歌が最も多く、その他同時代の歌人の歌が大半を占め、当代文学としての性格をもっていた。

- 『詞花和歌集』

『詞花和歌集』は八代集の第六にあたる勅撰和歌集である。崇徳天皇の命によって、藤原顕輔が撰集した。「詞花和歌集」も十巻構成であるが、両者の違いで最も顕著なことは『金葉集』が当代重視であったのに対し、『詞花集』では後拾遺時代の歌人つまり、和泉式部（16首）、赤染衛門（8首）を重視する方針をとっていることである。

- 『千載和歌集』

『千載和歌集』は勅撰和歌集の一つで、八代集の第七である。後白河天皇の命令によって文治三年（1187）に藤原俊成が撰集した。『千載和歌集』は二十巻で、伝統性を重視しつつ、新風を目指した。千載和歌集の構成は春（上・下）、夏、秋（上・下）、冬、離別、羈旅歌、哀傷歌、賀歌、恋歌（五巻）、雑歌（上・中・下）、釈教、神祇が二十巻の部類である。歌数は1288首で、そのほとんどが短歌である。

● 『新古今和歌集』

『新古今和歌集』は鎌倉時代初期に後鳥羽天皇の命令によって編集された「勅撰和歌集」いわゆる八代集の最後にあたる。『新古今和歌集』は二〇巻で、内容は春歌（上下）、夏歌、秋歌（上下）、冬歌、賀歌、哀傷歌、離別歌、羈旅歌、恋歌（一～五）、雑歌（上中下）、神祇歌、釈教歌となる。『新古今和歌集』は古今以来の伝統を引き継ぎ、かつ独自の美の世界を現出した。そして、和歌のみならず後世の連歌・謡曲などに大きな影響を残した。

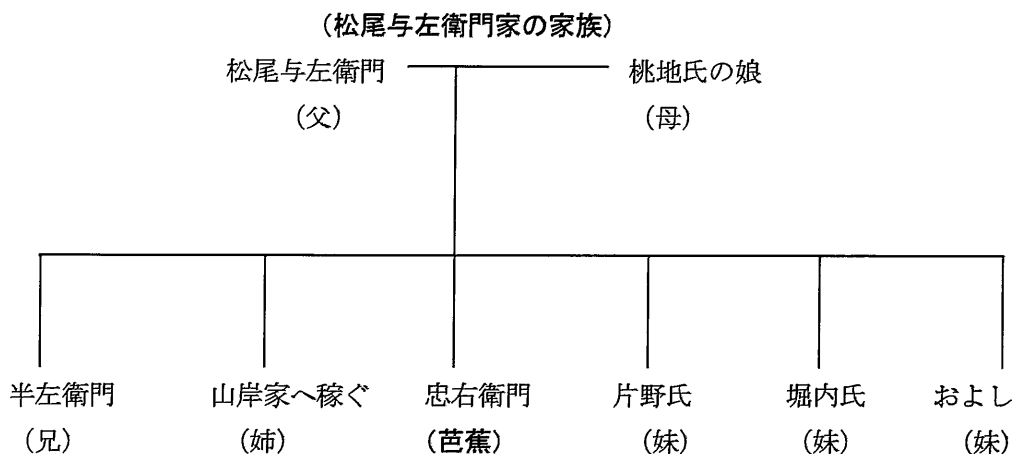
● 『新勅撰和歌集』

『新勅撰和歌集』は後堀河天皇の命令によって、藤原定家が『新古今和歌集』の約30年後に撰集した。この時期は、『新古今集』への興味が薄くなり、歌壇の方向性も失われていた。そして、天皇中心の文化は武家勢力の圧倒的な優位にかわり、歌風の状況が乱れていた。晩年の定家の和歌は、余情の表現を中心とした新古今時代の歌風から、平明な歌風へ転回した。この歌風が『新勅撰和歌集』に反映されている。『新勅撰和歌集』は二十巻で、部立は四季、賀歌・羈旅歌・神祇・釈教・恋歌・雑歌などがある。そして、藤原家隆（43首）、藤原俊成（35首）などが主な歌人である。

第二節、芭蕉の生涯と作品

(一)、芭蕉の誕生と俳諧との関わり

芭蕉の生涯を文学生活の面からたどって見ると、文学史上、芭蕉ほど人間的魅力のある人物はそう多くない。江戸時代前期の俳諧師である松尾芭蕉は寛永二一年（1644）伊賀の国上野（現在の三重県）で松尾与左衛門の次男として生まれた。芭蕉は一人の兄（松尾半左衛門）と一人の姉と三人の妹がいた。本名は松尾宗房、幼いころは金作と呼ばれていた。父母、兄弟については、次のように伝えられている。



松尾家は下級武士で農業を行い、母は伊賀の百地家の出であった。兄の半左衛門は藤堂家に仕える。父の死後は、長男として家を守った。姉は山岸家へ嫁ぐ。夫、陽和は、同じ伊賀

の士分であったと言われている。妹三人のうちの二人はそれぞれ片野氏、堀内氏へ嫁いだ。もう一人の妹のおよしは、兄半左衛門の養女となったと言われている。

芭蕉は、13歳の時父を亡くし、18歳の時、藤堂藩侍大将の藤堂良忠に料理人として出仕する。2歳年長の良忠は藤堂良精の三男だったが、二人の兄弟が早死にした結果嗣子となり、18歳のとき結婚したが、死別する。この良忠が俳諧をたしなみ、京都の北村季吟に師事したことが、芭蕉と俳諧が結びつくきっかけであった。文事を重んじた藤堂家は和歌をたしなんだと言われ、良忠が当時流行していた俳諧に親しんだことは不思議ではない。芭蕉は良忠から俳諧の伝授を受けて詠み始めた。そこで、良忠は芭蕉の名を、本名の宗房/“むねふさ”から“そうぼう”に変えた。そして芭蕉は俳諧を“そうぼう”という俳号で書き始めた。芭蕉の俳諧の作品で現存の文献に見える最初期のものに芭蕉が21歳の時出版された松江重頼編の『佐夜中山集』に掲載された次の二つの句がある。

姥桜さくや老後の思ひいで 松尾宗房
月ぞしるべこなたへ入らせ旅の宿 松尾宗房

ところが、芭蕉が23歳になった寛文六年(1666)良忠は25歳の若さで病死した。寛文六年からの芭蕉の動静は不明だが、京都に出て学問を究め、和学を北村季吟に、書道を北向雲竹に、漢学を田中桐江に、詩を伊藤坦庵に学んだとの説がある。寛文十二年(1672)29歳の正月、芭蕉は、当時の流行唄を詠み込んだ自分と他の歌人の発句60句を左右に配して、これまた流行唄や流行語を縦横に使った三十番の発句合わせを編んだ『唄おほひ』という作品を発表した。これは後に江戸で出版された。

(二)、江戸へ下る

芭蕉が俳諧師として立つために江戸へ下ったのは江戸に新進俳人の栄える余地があったからである。当時の京都と大阪は他の俳人いわゆる、京都は松永貞徳に始まる貞門俳壇の本拠地、大阪は西山宗因を総師と仰ぐ談林俳諧の発祥地で、ともに新進俳人の栄える余地がなかった。江戸へ下った芭蕉はまず日本橋小田原町の借家に俳諧師の看板を出すことにした。その時、日本橋は市中経済の中心地であるとともに、俳諧の愛好者である富裕な町人が多く住み、江戸俳壇の中心地でもあったからである。そして芭蕉は俳号として桃青を名乗った。桃青の号は文献では延宝三年(1675年)から見える。季吟あるいは仏頂禅師による名号だったという説もある。同年の五月には東下中の談林派の中心俳人西山宗因を歓迎する百韻連句に桃青として参加した。翌年の延宝四年(1677年)の6月に帰郷し、親友・旧友と再会を喜び、それからしばらくの間、京都に滞在し、七月にまた江戸へ帰った。

延宝五年(1678年)、松尾芭蕉は俳人としての収入では満足できる生活の安定を得られなかったため、延宝八年(1680年)までの4年間、神田川上水の普請工事に水役として携わっていた。これについては、甥の桃印の扶養のためであったという説と、当時恋愛中の女性がいたためであるという説などが存在する。

一方、芭蕉は34歳(1677)の冬に京都から来た俳人の信徳をまじえ、親交のある信章素

堂と三人で百韻一卷を作っている。翌年の春には、この三人で百韻二巻を作り、3月にその三巻をまとめて出版した。これが『江戸三吟』である。俳諧師桃青の名は次第に京都・大阪にも知られ始めた。延宝八年（1680）の冬、芭蕉は江戸俳壇の中心日本橋を去り、生活の資を少数の門人の喜捨にゆだねて川向こうの徳川家康によって新開拓された深川の草庵に隠栖した。深川に隠栖した理由として挙げられるのは一つには市中の喧騒と、不特定多数の顧客を対象とした俳諧師生活の俗臭に耐えかねたことが挙げられる。この草庵には日本橋の大きな魚商だった門人杉風の家が生簀があり、その小屋を改造して芭蕉を迎えたと伝えられている。入庵当時はまだ新開のさびしい土地であったので、季下という門人が庭に「バショウ」を植えたが、植物の芭蕉がよく根づき繁茂したので、人々は草庵を芭蕉庵と呼ぶようになり、やがてそれは芭蕉の称呼になった。

（三）、旅の始まり

天和二年（1682）刊の『俳諧関相撲』は歌仙一卷が三都 18 人の俳諧師によって詠まれ、芭蕉もそのなかに選ばれている。なお、この年の俳書では千春編『武蔵曲』に6つの発句が入集されており、芭蕉が俳人として有名になってきたということが分かる。いっぽう江戸では不幸なことに大火が相次ぎ、天和二年12月に駒込の大円寺を火元とする大火のために深川の草庵が急火に囲まれた。芭蕉は庵の類焼により、甲斐の国谷村の友人の高山を訪ね、天和三年（1683年）6月に江戸に戻るまで世話になった。同年6月に母が郷里で没した。天和三年の冬、江戸で門人たちが芭蕉庵を再建し、芭蕉は新庵に入った。この庵を中心とした生活は、元禄七年（1694）5月、芭蕉が最後の旅に出るまで続くことになった。

貞享元年（1684）8月、この秋、芭蕉は門人千里を伴って最初の紀行いわゆる、野ざらしの旅に出る。旅の詩人としての芭蕉らしい旅はこれから始まるのである。『野ざらし紀行』の旅には、少なくとも二つの目的があった。一つは前年6月に亡くなった郷里の母の墓参りであり、もう一つは友人と会うことだった。松尾芭蕉は西に進み、愛知、岐阜、滋賀、特に琵琶の湖の南側を通った。何人かの門人も出来、貞享二年（1685年）に江戸の芭蕉庵に戻った。この紀行で芭蕉は山本荷兮と一緒に名古屋で五つの歌仙『冬の日』を詠んだ。これは蕉風を代表する最初の作品であり、ここに蕉風俳諧確立の第一歩が見られると言われている。

『鹿島紀行』は『野ざらし紀行』を終えて2年後、芭蕉44歳の時、鹿島の根本寺に戻った仏頂から、月見に来ることを勧める手紙が届いた。深川での生活を始めてから7年がすぎた貞享四年（1678年）、芭蕉は曾良、宗波を伴い、秋の月見をかねて深川から船に乗り、鹿島の根本寺の仏頂を訪ねた。それから潮来の医師本間自準（俳号松江）と会って、江戸へ帰ってきた。続いて『笈の小文』という俳諧紀行文がある。この旅は1687年10月に江戸深川を出発し、故郷伊賀へ出て、11月に名古屋に着き、三河の国の若い門人・杜国を訪ねるものであった。芭蕉が杜国と初めて会ったのは『野ざらし紀行』の旅の途中に名古屋に立ち寄り連句を詠んだときだった。その後、芭蕉は伊勢・吉野・大和・須磨などを旅行し回ってい

る。

『更級紀行』は貞享五年（1688年）8月、芭蕉が越人を伴って、名古屋から木曾路・更科を経て、江戸に帰るまでの旅を叙したものである。これはその前の年の10月に江戸を発った『笈の小文』の旅に続くものである。『笈の小文』は須磨・明石訪問をもって完結しているが、その後も旅は続けられ、京都・大津・名古屋・鳴海を巡っている。両者は同じ旅の紀行文ということになるが、しかしながら、紀行文の形式から見ると、『笈の小文』は時間的な経過に従って叙述され、散文と発句が配置されているのに対し、『更科紀行』は、散文が主で、発句が後に一括して載っている。

『更科紀行』の旅から江戸深川の芭蕉庵へ戻って、元禄二年（1689）の正月を迎えると、芭蕉は『奥の細道』の旅に出ることを思い立ち、芭蕉庵を売って、杉風の別荘に移った。そして、「草の戸も住み替わるよぞ雛の家」を旅の発端として、家の柱に上記の俳句を残したのである。元禄二年3月から9月にかけての『奥の細道』に至る一連の旅の季節が始まる。松尾芭蕉の『奥の細道』は江戸から大垣までの旅を中心に書いたものであり、人と人の付き合いを通して旅で直面した様々な人間関係が明確に表現されている。松尾芭蕉は旅でいろいろな場所に行き、様々な人と出会って、その時代の習俗と土地の歴史に直面した。『奥の細道』は「月日は百代の過客」という文章から始まり、現代はこの旅から三百年の年月を経たが、これは世代にすれば百世代のことになる。『奥の細道』は日本の北国に生きる自然や人々と、その時折の俳句を織り交ぜて描いた紀行文である。芭蕉は基本的には弟子の曾良のみを連れてほとんどの行程を歩いた。9月3日、大垣に到着したところで『奥の細道』という紀行の旅は終わった。大垣では「蛤のふたみに分かれ行く秋ぞ」と言う俳句を友人や門人との別れを大垣で著し、旅を締め括った。その後、伊勢に向けて発した。芭蕉は“旅の詩人”と呼ばれ、生涯を旅の中に明け暮れたように思われたが、紀行文を残した旅は、この5回に限られている。

（四）、最後の旅

元禄二年の9月下旬、芭蕉は久居の知人を訪ねて二、三日泊まる。芭蕉の姉の嫁ぎ先が久居であったとする説もある。12月中の京都滞在中、去来に「不易・流行」の理念を説き、元禄三年（1670）の1月3日、芭蕉は伊賀に帰った。元禄四年（1671年）の4月18日に嵯峨に入り、5月4日まで泊まった。嵯峨での17日間の記録は嵯峨日記と言われている。このころ『笈の小文』が成立したと言われている。10月28日、江戸に帰った。帰着後、日本橋の彦右衛門方の借家に落ち着いた。元禄五年（1692）年の5月下旬、三軒目の芭蕉庵が竣工された。杉風は芭蕉の経済上の面倒を見たと言われている。元禄七年（1694）の4月に『奥の細道』は成立した。5月頃、芭蕉は帰郷のため江戸を旅立った。5月1日、次郎兵衛を伴い、帰省につく。曾良も途中まで同行した。品川までは人々に見送られた。5月13日に箱根で一泊し、曾良と別れた。28日故郷の上野に着いた。9月8日右衛門を伴い故郷を出て、奈良を経て大阪に着いた。旅の途中病に倒れ、大阪・御堂筋の花屋仁左衛門宅で去来の門人

に囲まれ「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の句を残して10月12日に客死した。

芭蕉紀行文の略年譜

(松尾芭蕉は正保元年(1644)に生まれた。)

- 貞享元年(1684) 8月「野ざらし紀行」の旅に発足
貞享二年(1685) 4月江戸に戻る。
まもなく『野ざらし紀行』執筆開始
同年(秋ごろ) 『野ざらし紀行』第一稿
(芭蕉真蹟卷子本)が成立
貞享四年(1687) 8月「鹿島詣」の旅におもむく
同年(1687) 江戸帰府、『鹿島詣』まもなく執筆開始
同年(1687) 10月25日「笈の小文」の旅に出る
貞享五年(1688) / (元禄元年8月11日「更科紀行」の旅に出る
元禄二年(1689) 3月27日「おくのほそ道」の旅に発足
元禄三年(1690) 『更科紀行』が成立
元禄四年(1691) 4月18日より5月5日
「嗟峨日記」が始まる。
元禄四年頃(1691) 『笈の小文』が成立
元禄五年の後半(1692) 『おくのほそ道』が執筆開始
元禄七年(1694) 『おくのほそ道』の草稿が完成
(元禄七年(1694)10月12日に松尾芭蕉は大阪で客死した。)
元禄十五年(1702) 『おくのほそ道』が刊行
宝永元年(1704) 『更科紀行』が刊行
宝永六年(1709) 『笈の小文』が刊行
宝暦二年(1752) 『鹿島詣』が刊行
宝暦三年(1753) 『嗟峨日記』が刊行
明和五年(1768) 『野ざらし紀行』が刊行

第三節、文学史における芭蕉の位置

(一)、和歌から俳諧へ

中世の後期の時代に入ると武士や庶民が台頭してくることによって、和歌には笑いなどをテーマにして何人かの歌人たちが一緒に詩を五-七-五-七-七-五-七-五-七-七の音節で作るようになり、それは後の俳諧の発端となった。最初は「俳諧之連歌」と呼ばれるものであった。

時代を振り返ってみると、連歌は南北朝時代から室町時代にかけて和歌の沈滞した際に大成された、日本の伝統的な詩形の一つである。連歌は一首の短歌の上下を二人で唱和することから起こった。多人数による連作形式を取りつつも、厳密なルールを基にして全体的な構造を持つ。和歌の強い影響のもとに成立し、後に俳諧の連歌や俳句がここから派生している。連歌は五七五、七七を交互に連ねて五十句、百句に及ぶもので、句数が重なっても、その中の二句ずつが意味・気分の上で繋がっていれば連歌になる。何人かが一座して作る共同制作の文学であり、このような文学が生まれたのは集団的な時代思潮の影響があったからであろう。

連歌の大成者は二条良基であり、彼は最高の貴族政治家であるとともに古典の知識も深く、歌道を復興した文学者であった。特に連歌に熱心で、延文元年（1356）に最初の連歌撰集である「菟玖波集」二十巻を編纂した。そして、彼は多くの連歌をまとめて一つの歌集を作成した作業によって、連歌の第一流の文学としての地位を確立した。

連歌はもともと機知の文学として発生したが、やがて和歌と肩を並べるようになった。その後、「俳諧之連歌」と名付けられ、「俳諧之連歌」がやがて「俳諧」とのみ呼ばれるようになり、近世に入ると全国的に盛んになった。

- 貞門俳諧

近世初期は新しい学問の繁栄や印刷術の発達、あるいは仮名草子の流行などによって、庶民に文字文化が普及した時代であったが、また俳諧という新様式の文学を確立した時代でもあった。そして、俳諧は庶民教化に重要な役割を果たした。前の時代に「言い捨て」の娯楽として楽しまれてきた俳諧の連歌は、中世末期に、何人かの俳諧師の努力で独自の様式を形成する機運を生じたが、それでも当時の俳諧は文学性の低いものに過ぎなかった。近世に入って庶民層に文学享受の欲求が高まるにつれて、俳諧は平易さから親しまれ流行した。この頃、松永貞徳が京都に出て、俳諧の式目を制定し、『犬筑波集』によって作法を定め、俳諧のジャンルを確立した。松永貞徳は武家に生まれ、父が連歌師でもあったことから連歌を学び、中世的、伝統的な環境の中に育った。かれの俳諧観は、俗語や漢語などで賦する連歌ということに基準をおき、俳壇の中心的な存在となった。この貞徳の門流を貞門という。

- 談林俳諧

貞門の俳諧は連歌から独立した文芸の一つで、庶民階級の文学的な欲求を満たしたが、言語遊びの面白さにとどまったので、まもなく貞風に飽きる俳人たちが次第に増えていった。そこで、大坂町人階級を背景に俳諧革新の動きが起こった。それは西山宗因を中心とする談林派であった。西山宗因は肥後（今の熊本県）の八代の武士であったが、大坂天満神の連歌

の宗匠となった。そして、松江重頼³¹らの影響もあって、俳諧に親しむようになった。やがて、独自の俳諧観のもとに作風を示した。この西山宗因を中心とする談林派によって、新傾向の作品が相次いで発表され、その俳諧は数年で全国的な流行を見た。こうした談林俳諧の興起によって、はじめて庶民階級の文学が発生した。談林派の主要作家として、江戸に「談林十百韻」の編者の田代松意、京都に田中常矩、大坂の井原西鶴などの有力俳人がその指導を担い、談林俳人として活躍した。

一方、談林の俳諧は貞門の保守性を脱したものの、句風と奇抜な見立てを基調としていただけに、その流行に伴って文芸としての詩情を失い始めた。宗因自身も晩年には俳諧を廃し、連歌に帰ったといわれる。常に時流の先端を切っていた西鶴の俳諧の素材とした現実生活の描写も、俳諧形式においてはすでに限界に達していた。宗因が亡くなると、流れは決定的となり、談林俳諧はここに終わったが、それが行き詰まって蕉風が起こったということになる。また、談林俳諧は貞門俳諧が和歌優美の世界に近寄せた振り子を、また非優美の方へ振り戻し、やがて、非優美の美と言える、新しい美の世界を切り開く芭蕉の登場を準備したのである。芭蕉自身も宗因の談林俳諧の史的意義を評価している。

(二)、芭蕉の登場

芭蕉が 21 歳の時出版された松江重頼編の『佐夜中山集』に掲載された次の二つの句は、芭蕉は最初の撰集である『貝おほひ』には判詞などを自分で書いているが、それは談林俳諧の中で斬新な内容であった。

江戸に出てから芭蕉は、大坂の西山宗因を迎え、俳諧百韻に参加し、談林俳諧に傾倒していった。この百韻には季吟門の山口信章（のち素堂）などが参加しており、芭蕉は彼らと親交を深め、宗因流談林俳諧の熱烈な支持者として活動を始めた。俳号もこの延宝三年に宗房から桃青に改めた。俳号を変えたことは貞門から談林へという俳風の転換点となったと考えられる。延宝四年（1676）、桃青（芭蕉）は百韻二巻を興行した。その後、芭蕉は次々と自派の俳書を出版し、プロの俳諧師となって、日本橋小田原町の家を引き払い、深川の本番所近くに草庵を構えて移り住んだ。杉山杉風などの有力な弟子もいたが、更に入門者も増えた。1680年4月に刊行された『桃青門弟独吟二十歌仙』は、桃青門の結束と実力の評判を世に示すものであった。

このように宗因風の新進俳人として注目された桃青（芭蕉）であったが、談林俳諧自体には行き詰まりが見え始めていた。桃青自身も言語遊戯としての俳諧に空虚さを覚え始め、生き方に懐疑を抱くようになっていた。そこで、延宝八年（1680）の冬、点者稼業を放棄し、

³¹ まっえしげより（一六〇二～一六八〇）は江戸初期の俳人で談林風展開に機縁を与えた。

日本橋を去って郊外の深川にある草庵で隠棲した。この草庵での沈潜の時期を経て、やがて、新しい俳諧、芭蕉俳諧が生み出されていった。

(三)、芭蕉と文学

● 蕉風の始まり

草庵で隠棲した時代、延宝八年（1680）の頃の芭蕉は、西行などの日本の文人・歌人、中国の詩人、または禅や荘子思想³²から影響を受けた。そのことが後の芭蕉の人生と文学に大きく関わってくる。特に、この時代は芭蕉の思想を豊富にし、俳諧について、談林俳諧時代の外面的な理解から内面的な理解にまで深めることができた。このとき、談林俳諧から新しい方向を探している俳人たちの活動は、京都と江戸に中心を置き、天和元年（1681）正月には京都の俳人たちによって『七百五十韻』が刊行され、これを受けて芭蕉・其角などは二百五十韻を『俳諧次韻』として刊行した。そして、翌年には京都の俳人が東下し、芭蕉・杉風ら江戸の俳人とともに、連句や発句を集めた『武蔵曲』を刊行し、一派の『虚栗』の撰集もしたことで、芭蕉は一流の俳人として認められるようになった。そして、芭蕉の俳諧は連句と発句と同時に破格調句や漢詩文調句を特色とした。他の俳人たちも、芭蕉とともに、談林俳諧的な表現から更に、新風の言語遊戯を試してみたが、過去の俳風から抜け出すことはできなかった。けれども、芭蕉の発句は、思索性と超俗的な姿勢などが強くリズムと結びつき、詩としての俳諧を切り開くものとなり、独特な俳風を根づかせ、蕉風を展開するものとなった。

一六八一年に門人の李下が庭に「バショウ」を植えたが、植物の芭蕉がよく根づき繁茂したので、人々は草庵を芭蕉庵と呼ぶようになり、やがてそれは芭蕉の称呼になった。それ以来、芭蕉も俳号として「芭蕉」を使用した。そして、一六八二年の刊行した『武蔵曲』に初めて「芭蕉」の俳号が用いられた。

● 旅を通して蕉風の始まり

貞享元年（1684）8月、芭蕉は門人千里を伴って最初の紀行、いわゆる、『野ざらしの旅』に出る。旅の詩人としての芭蕉はここから始まる。この旅がきっかけで、旅中の各地で新しい門人を作り、文学的にも大きな収穫があった。そして、俳諧師としての新理念を旅の体験を通して作品の形で示したことは、最大の収穫であった。『鹿島紀行』の旅は、『野ざらし紀行』を終えて二年後に始まる。続く『笈の小文』の旅は1687年10月に江戸深川を出発し、故郷伊賀へ出て、11月に名古屋に着き、三河の国の若い門人・杜国を訪ねたものである。

元禄二年（1689）の正月を迎えると、芭蕉は旅に出たいという思いに心を動かされ、芭蕉

³² 荘子は中国の戦国時代の道教を始祖した思想家である。

庵を売って、杉風の別荘に移った。そして、「草の戸も住み替わるよぞ難の家」を旅の発端として、家の柱に上記の発句を残したのである。元禄二年3月から9月にかけての『奥の細道』の一連の旅が始まる。『奥の細道』は江戸から大垣までの旅を中心に書いたものであり、人と人の付き合いを通して旅で直面した様々な人間関係が描かれている。芭蕉は旅でいろいろな場所に行き、様々な人と出会って、現在（芭蕉にとっての）と過去が交錯するような状況を経験した。『奥の細道』は「月日は百代の過客」という文章から始まる。『奥の細道』は東北に生きる自然や人々と、俳句を織り交ぜて描いた紀行文の一種である。芭蕉は基本的には弟子の曾良のみを連れて、ほとんどの行程を歩いた。9月3日、大垣に到着したところで『奥の細道』の旅は終わった。大垣では「蛤のふたみに分かれ行く秋ぞ」という俳句で、友人や門人との別れを表し、旅を締め括った。その後、伊勢に向けて出発した。芭蕉は“旅の詩人”と呼ばれたが、紀行文となる旅は、この五回のみである。

この旅は芭蕉に大きな成果を与えた。特に「古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよ」（「許六離別詞」）つまり、自分の目で新しい美を発見することが必要だという考え方を発展して、「不易流行」の考えとなり、この芸術観はやがて芭蕉俳諧の中核となった。そして、江戸に戻った（元禄六年）1693年頃、長年に渡って世話した甥の桃印が亡くなるという辛い経験があり、芭蕉はその影響から、「軽み」という俳風を開いた。「軽み」とは庶民生活を題材にし、平明な表現で俳諧を作ることである。そして、「軽み」の代表作と呼ばれる『炭俵』と『続猿蓑』を発表した。

俳人として、芭蕉は俳諧の芸術性を追求した。和歌・連歌では取り上げられない素材をも使い、雅語だけでなく漢語・俗語を用いることによって、和歌・連歌の伝統的な美とは異なる新しい美を作り出した。

特に俳諧に「軽み」として使われた用語は決して、和歌・連歌に詠むことができなかった俗語も用いていた。芭蕉は言語遊戯の壁を越えて、新しい美の俳諧を詩として誕生させた。日常の言葉で美を表現したことは、文学史上の大きな功績だった。芭蕉はそれだけではなく、今まで美として認められていた美の様相を見直し、新鮮な感受性と表現力でそれを表した。古人の伝統を継承し、その上に自己の創造を生かそうとしたのである。そして、「不易流行」、「軽み」という理念が門人たちに説かれたが、芭蕉没後、門人たちはそれらを発展させることはできなかった。

第四章、アッギエーエと紀行文

第一節、インドにおける紀行文の歴史

古代インドでは、ヒンドゥー教の教義により、渡航が禁じられていた。そのため外国との関わりについては、限定されていた部分もあるのだが、対して外部からは陸路、海路を問わずに、何人かの外国人がインドの文化や仏教の経典を目的としてインドを訪れた。古代ギリシャ人のメガステネスはチャンドラグプタ（紀元前 317 年～紀元前 298 頃）時代にインドに到着した。10 年以上パータリプトラ（現在のビハール州）に滞在して、たびたびインド各地を訪ね、当時のインドのカースト制度、民族、神話などについて記述した。

399 年、中国の僧であるファヒアン（法顕）はチャンドラグプタ 2 世（生没不明、在位：紀元前 380 年～415 年）の時代にインドへ求法の旅に出た。仏陀が生まれた地のルンビニ（現在のネパール）と仏教の聖地であるラージャグリハ（現在のビハール州）に滞在し、当時の中央アジアやインドについて記した旅行記は貴重な史料となっている。

そして、中国の僧であるフエン・タサング（玄奘三蔵）が古代北インドの大王であるハルシャ・ヴァルダナ（590 年～647 年）時代にインドを訪れた。17 年間もインドに滞在し、当時のインドの社会、経済、宗教及び文化的条件について記述した。

一方、11 世紀のイスラム世界の知識人であるアル・ビールニー（973 年～1048 年）という学者も十数回以上インドを訪れ、インドの民俗、歴史、法律とインド言語のサンスクリットを習得して『インド誌』を 1030 年に完成させた。アル・ビールニーはインド史の最初の学者としても知られている。

1335 年、中世のインド王のモハンマド・ビン・トゥグルク（1300 年～1351 年）の時代に、アラブのモロッコからイスラム法学者・旅行家のイブン・バットゥータ（1304 年～1377 年）が到着した。インドに着いてから 7 年間インド皇帝にカーディー・シャーリア（裁判官）として仕えた。

前述の通り、ヒンドゥー教が中心となっていた古代から中世にかけてのインドでは渡航が禁じられていたので、国外に出る者はほとんどいなかった。しかし、イスラム教の伝来によって、ムスリムとなったインド人は巡礼のためにメッカに向かうようになり、中には海路を選んだ者もいた。

更に、20 世紀の初め頃には、タゴール（1861 年～1941 年）のように紀行文を書くためにインドの国外に出る者も現れた。タゴール以外にラフル・サンクリトヤヤン（1893 年～1963 年）、カカ・カレカル（1885 年～1981 年）、アッギエーエ（1911 年～1987 年）、ナガラジュン（1911 年～1998 年）らも紀行文を書き始めた。

これらの作家の紀行文の中でも代表的な作品が、ラフル・サンクリトヤヤンが 1944 年に出版したアリア人の歴史をフィクション的に語る『ヴォルガ・セ・ガンガ、*वोल्गा से गंगा*、ヴォルガからガンガ』、や 1953 年に出版されたアッギエーエの『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・

ヤード अरे यायावर रहेगा याद、この旅人は記憶に残るだろう』、カカ・カレカルの 1940 年に出版された『ヒマラヤノ・パラワソ、ヒमालयनो प्रवास、ヒマラヤへの旅』である。

インドでは古代から近代にかけて執筆された紀行文は極めて少ない。そもそも古代インドでは紀行文を書く文化さえもなかったのだが、近代になると紀行文を執筆する書き手が登場し始めた。中でも、生来の旅人を名乗るアッギエーエが執筆した『レ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』は、松尾芭蕉が執筆した『奥の細道』との類似点が存在すると考えられるので、本論で両作を比較しながら論じていきたい。

第二節、アッギエーエの紀行文

インド人の詩人、学者、知識人である「サチダナンド・ヒラナンド・ワツヤヤヌ」(सच्चिदानंद・हीरानंद・वात्स्यायन) (1911 年～1987 年) はアッギエーエという詩名で知られ、インドの文学界で高い評価を得た才能ある作家である。アッギエーエは当時の韻文と散文、両方に影響を残した詩人であり、散文と韻文によるインドにおいては珍しい紀行文も執筆した独特な作家として知られている。

アッギエーエは詩集、小説、物語、評論書、翻訳書などの様々なジャンルの作品を執筆すると同時に、二つの紀行文である『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード (अरे यायावर रहेगा याद、この旅人は記憶に残るだろう)』(1953 年) 『エク・ブンド・サフサ・ウチリ』(एक बूंद सहसा उछली、訳：急に飛んだ一滴)』(1960 年) を発表した。

(一)、アッギエーエの紀行文の『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』

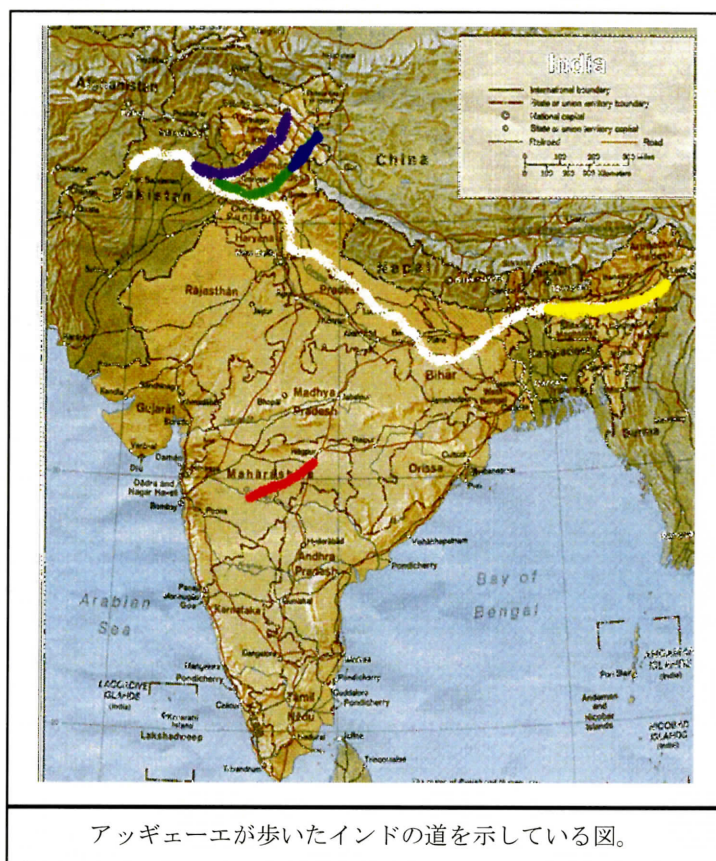
韻文、散文、当時の写真、絵などが集成した本作はインドでは珍しい紀行文として注目されている。詩人であるアッギエーエは、この旅で出会った自然、風景、人物、伝統、文化、場所などについて歴史と関連付けて紹介している。更に詩人として優れた観察眼で自然を描写し、多彩な詩を詠んだ。つまり本作は歴史や文化、文学などを組み合わせた作品である。1953 年にサラスヴァティー・プレス社から出版された本作は、7 部から構成され、17 編の詩も集録されている。

全 228 ページからなる長編紀行文である本作は七部構成となっている。そのページ配分には偏りがあり、第一部が 78 ページ(～78 ページ)、第二部が 57 ページ(79～136 ページ)、第三部が 19 ページ(137～156 ページ)、第四部が 18 ページ(157～175 ページ)、第五部が 12 ページ(177～189 ページ)、第六部が 29 ページ(191～220 ページ)、第七部が 7 ページ(221～228 ページ) という構成となっている。とりわけ第一部が長く、対して第七部が極めて短い。

本作は、アッギエーエが軍属として各地の折衝に当たっていた時期に執筆したものであり、インドの東北地方を中心とした任務の中で訪れた地方の忘れられていた過去の伝統や歴史などを再発見し、当時の人々に伝えようとした。

本作は七部構成に別れており、その内第一部から第六部までは、アッギェーエのインド各地の旅の記録である紀行文となっている。最後の第七部については、アッギェーエが旅に出るための動機や理念が語られている。

本論においては、アッギェーエの全行程を作品の構成に合わせて六つに分類している。それぞれの行程は、下図³³に色分けして示した通りである。これらの呼び方は、部数に合わせて第〇行程とする。



上記の図にある白線は、第一部で描かれる東インドからトルカムまでの第一行程を示している。紫線は、第二部であるラホールからカシミールまでの第二行程を示すものである。第三部のラホールからマナーリまでの第三行程は図では緑線で描かれている。青色で描かれるマナーリからロフターンまでが第四行程として第四部となっている。図の赤線は第五部で描かれる第五行程でインドの西側にあるエローラからアウランガーバードまでの旅である。黄線は第六行程で、本作品では第六部となり、アッサム州の奥までの旅である。

ここでは作品の重要な部分を紀行文の流れに沿って論じていく。アッギェーエは紀行文を執筆するに当たり、序文として次のような詩を詠んでいる。

³³ 参考文献は、マペリ、インド・マップ、2013年7月13日、<http://mappery.com/India-Map-3>からのものである。

〈ヒンディー語〉

पार्श्व गिरि का नम्र, चीड़ों में डगर चढ़ती उमंगों-सी बिछी पैरों में नदी, ज्यों दर्द की रेखा/
विहग-शिशु मौन नीड़ों में/ मैंने आँख भर देखा/ दिया मन को दिलासा-पुनः आऊँगा/
भले ही बरस-दिन-अनगिन युगों के बाद! क्षितिज ने पलक-सी खोली तमक कर दामिनी
बोली: 'अरे यायावर, रहेगा याद!' "अरे यायावर रहेगा याद", पेज 7

〈訳〉

パルシャルワ山には優しい松が立っていて、坂は情熱的に上り、川は眼下に流れる。線のような川は痛みを感じているようだった。巣で待つ小鳥のように。(この光景を)私の目はよく見た。又来ると慰めた。たとえ、何年経ったとしても。地平線は目を開き、雷鳴は応えた。「旅人よ。覚えて置くぞ」 『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』、ページ7

本作品の第一部で描かれる第一行程は、アッギエーエがインドの東側にあるアッサム州への旅から始まる。この旅は、長い距離にも関わらず古いトラックしか移動手段はなかった。山谷を通る道路ではこの古いトラックはいつ壊れてもおかしくなかったので、帰って来られるかどうかとも分からない旅になっていた。アッギエーエのインドの東側から始めた旅は次のような行程であった。

本作品の冒頭で、作者は自分を「旅人」になぞらえ、常にどこかに向かっている者だとした。ある場所からほかの場所に絶えずその土地の文化と文明を観察しながら、無限に先に進んでいきたいという気持ちを次のような文章と詩で示している。

〈ヒンディー語〉

चल चल देता है लाद लादकर बार बार बंजारा

सब ठाठ धरा रह जाता; धन बस दूर क्षितिज का तारा

यायावर को भटकते चालीस बरस हो चलें, किन्तु इस बीच न तो वह 'अपने पैरों तले घास (या मॉस !)' जमने दे सका है', न कुछ ठाठ जमा सका है, न क्षितिज को कुछ निकट ला सका है- उसके तारे को छूने की तो बात ही क्या ! कितने स्थल उसने देखे जहाँ बैठ कर ऋषियों ने देहों पर वल्मीक उगा लिये, जहाँ मुनि तपस्या करते करते पाषाण हो गये, जहाँ देवता जम कर पर्वत-श्रृंग बन गये, जहाँ मानवों ने एहिक कक्षाओं-वासनाओं से मुक्ति पायी-किन्तु यायावर ने समझा है कि देवता भी जहाँ मन्दिर में रुके कि शिला हो गये, और प्राण-संचार के लिये पहली शर्त है गति, गति, गति ! छुटपन में चीनी कहावतों के एक संग्रह में जिस वाक्य ने उसे सब से अधिक प्रभावित किया था और जिसे उसने अपना गुरु मन्त्र मानकर डायरी के मुख-पृष्ठ पर लिख लिया था, वह था/

'मैं क्यों चाहूँ कि मेरी अस्थियाँ भी मेरे पुरखों कि अस्थियों के साथ एक सुरक्षित समाधि-स्तूप में दबी रहें? जहाँ भी कोई चला जाय, वहीं कोई हरी-भरी पहाड़ी मिल जाएगी ...'

"अरे यायावर रहेगा याद", पेज 4

〈訳〉

旅心がそそられて漂泊の思いが止まず

快適さよりも、旅の苦勞を選ぶ

「旅人は 40 年間歩き回り、その間、止まることもなく、快適な生活を選ばなかった。空を飛んで星を触ることのようであった。聖人たちは苦行の結果身体を蟻塚に変えた

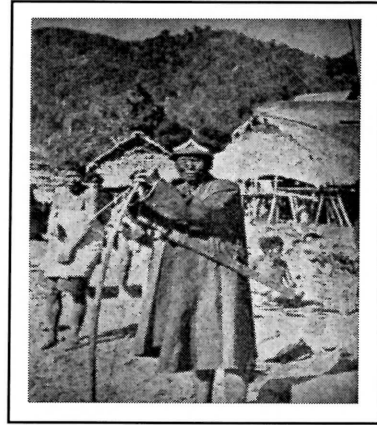
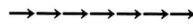
り、瞑想して石のようにもなった。更には、凍りついて山の一部分にもなった。そのようにして、人間は動くことをやめて、欲望から開放され、寺では動かない神が偶像になっている。しかし、旅人のみは、生きていることの秘訣は動くことであるとした。子供の時、中国のことわざ集の中にある表現に強く影響を受けたので、大事な言葉として自分の日記の表紙に記述したのである。それは次のようである。

なぜ、私は先祖と同じ埋葬塚に自分の遺灰を埋められなければならないのでしょうか？
もし、他の所に行けば、美しい野原と木に覆われた山を見つけるでしょう。

『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』、ページ 20

アッギューエはアッサム州から始まり、旅の途中で見た歴史的に重要な場所や遺跡、寺院などの文化的な価値を説明し、インドの社会にどのような影響を与えたかを詳しく記述した。

ミシュミ人部族の戦士



それらの例をいくつかをあげる。インドの東側の国境に住んでいるミシュミ人という部族は昔からの伝統的な生活を営んでいる。この部族はわずかな人数で自然の中で暮らしており、バイソンを象ったトーテムを崇拝している。このミシュミ人はインドの国境を超えた、中国とチベットにも居住している。

アッギューエは東北の旅を続けて「サディア」という場所に辿り着いた。文中では、最初にこの場所の元々の呼び名を言語的に正確な表現で記述し、それから、この呼び名の由来を歴史的な経緯から紹介した。

インドの東北の地方にラトナ・ドーワジュ（1146年～1244年）という強大で遠征に熱心な王がいた。この王は教育熱心でもあり自分の王子に様々な教育をさせるために遠方に留学させていた。しかし、その王子は他国で急死した。ラトナ・ドーワジュがこの川の辺に新しい築城を命令していた時、王子の遺体が王のもとに届けられた。そのために、この美しい場所はサヴォディア（遺体が渡された）またはサディアと名付けられたのである。

サディアに住んでいたスティヤ部族は当時から文字を持っており、その言語にはヒンディー語やサンスクリット語の由来となった語も見られるので、当時は学問に優れた文化的な部族であったことがうかがえる。しかし、その地域の主要な河川であるブラムプトラ川の流域が南の方向に移ってしまったこととアホム族に支配されたことが原因でスティヤ部族

は離散してしまっただ。今では、スティア部族が住んでいた地域は、森林に覆われている。

旅を続けてアッギエーエは、アッサム州の首都であるグワーハーティーに着いた。グワーハーティーとはグワーという語とハーティーという語の結び付いた熟語である。グワーはビンロウの実、ハーティーは市場を意味する。かつてここにはビンロウの实の有名な市場があったのでそう名付けられた。

東インドの旅をトラックで進めるアッギエーエは、トラックの故障を自分で修理することにもなった。そんな中でもこの東インドの所々の様子はもちろん通った場所の名前の由来や使われている言語などの共通点、相違点などを紀行文に記している。

更に、インドの東側のアッサムから西側にあるパンジャブ州の方に旅を続けた。ある晩、雨が降り、山谷を濡らし、川に流れ込んだ。その翌朝の景色の自然の美が紀行文の中で描かれている。

アッギエーエはこの美しい風景の中、先に進む気持ちを次のように記述している。

〈ヒンディー語〉

「अप्रैल के एक गीले दिन भोर होते ही 'लाद चला बंजारा' अभी झुटपुटा था, वर्षा के कारण और भी फीका/ यायावर का मन स्तब्ध था/ उसके लिए सब रैन-बसेरे है, कहीं यात्रांत तो है ही नहीं, इस लिए कहीं से चलने पर उदास होना निरर्थक है; किन्तु किसी-किसी पड़ाव पर जो शान्ति और स्नेह मिल जाता है, उसका आकर्षण तो बना ही रहता है... रहे, मगर राह पर आज जो मिला, उसे आज की लब्धि नहीं, कल का पाथेय मानना होगा, और चलना होगा चल यायावर चल! जहाँ भी कोई चला जाय, वहीं कोई हरी-भरी पहाड़ी मिल जाएगी!' कल का पाथेय मिला है तो कृतज्ञ हो, प्रणाम कर, और आगे बढ़

“अरे यायावर रहेगा याद”, पेज 20

〈訳〉

「4月のある夜に雨が降り、その夜明けにこの遊牧民の旅が始まった。雨が降ったので周りの色が薄れていたし、旅人は無感動になっていた。旅人にとっては全ての場所が寝床のようなものであり、一か所に定住することはない。なので、どこかから去るのに悲しくなる必要はない。愛情と感情が溢れるところの魅力は心に残るのだから。今日途中で得たものは今日のためではなく明日の励みの要因だと思って先に進む必要がある。旅人よ、行くのだ！美しい野原と木に覆われた山を見つけるだろう。だから、明日のために見出した道に感謝する。よし、前進しよう。

『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』、ページ 20

続いて、アッサム州からクーチュ・ビハール（現在はベンガル州にある。）に到着した。アッギエーエが通った道はクーチュ・ビハールの16世紀頃の古代の帝王によって作られたものである。ヒマラヤ山脈までに12の門があり、この門をブータン人、ネパール人、チベット人がインドへの巡礼のために通った。同時にこの門は商人、盗賊、侵略者、野心家などにも使われた。

西インドのパンジャブ州の方に進み、途中でアッギエーエはシリグリという場所から

自分のトラックを蒸気機関車の貨車に乗せた。夜通し、露天で蚊や集中豪雨に悩まされながら、バラックプールに着いたのは午前三時のことだった。

翌日、またトラックでの旅が始まった。タージ・マハルのある町アーグラへの道の途中、何回も牛車の群と出会い、広くもない道をトラックは牛車の後ろをその速さに合わせて走ることになった。

アーグラに着いたアッギエーエは、タージ・マハルに向かう途上の芝生で食事をし、その近くの有名な詩人であるミーヤ・ナジール³⁴（1735年～1830年）の忘れられた墓に参拝した。

ナジールは、生前、大変な人気があり、マドラサ（イスラム世界における学院）への通勤の途中で人々に呼び止められ、詩を詠むようにせがまれた。大勢の人に応えているうちにマドラサに着く頃には日が暮れてしまう。そして、その日の授業は休みということになる。

〈ヒンディー語〉

「एक वह दिन था, जब कविता का स्वाभाविक उद्रेक राह चलते को खींचता है और फक्कड़ कवियों की बानी सीधे लोक-हृदय में पैठ जाती थी..... हमारी कविता बानी नहीं रही, लिखतम हो गयी है; हृदय से हृदय तक नहीं जाती वरन एक मस्तिष्क की शिक्षा-दीक्षा के संस्कारों की नली से होकर कागद पर ढाली जाती है जहां से एक दूसरा मस्तिष्क अपने संस्कारों की नली से उसे फिर खिंचता है

“अरे यायावर रहेगा याद”, पेज 35

〈訳〉

ナジールの時代の詩は、人々の興味を引き起こし、直接人々の感情に訴えていた。けれども、アッギエーエのような現代の詩人の詩は直接感情を訴えることではなく、教養のための書物として読まれるばかりである。更に、前の時代のように心から心に伝わらなくて、頭から出た詩は教養の書物となり、又書物を通して人々は自分の教養として理解する。

『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』、ページ 35

中世時代のタージ・マハル、アーグラ城を満喫しながら、栄華を誇った古代帝国の都市が遺跡となり、高名な学者や詩人が今では人気のない墓の下で眠っていることに、アッギエーエは深い感慨を覚えた。

15世紀の盲目詩人であるスルダースが住んでいたヤムナー川のほとりには、記念の庵が建っている。アッギエーエはそこを参拝した。

さらにアッギエーエは旅を続けて、パンジャブ州のジャランダルという都市の近くにある公園に野宿することにした。アッギエーエはこの公園にとっても心が引かれた。最初公園の門の前に町から4マイル離れているという計測石があったので、公園を「チャウミラ・バーグ（訳：四マイル公園）」と呼ぶことにした。それから、公園に泊まってその外を歩いてみると近くには誰も住んでいないようだったのでその公園の呼び名を「シマント（訳：限界）」という名前に変えた。更に何日か公園に泊まっていると、公園の周りにカシヤ瘻の花が咲き誇っていたことに気付いたので、アッギエーエはこの公園の名前をまた変えて、今度は

³⁴ 20万詩を執筆したといわれるナジール・アカバルアバディーの詩は、現在まで6千詩が残っている

「アマラタシ（訳：カシヤ瘦の公園）」と名付けた。その花の美しさは、その後もアッギエーエが旅を振り返るたびに記憶に蘇った。

冬が始まり、アッギエーエはインドの西側にあるカイバルの方に旅を進めた。冬のカイバルは厳しい寒さに覆われているが、彼の心は熱烈に旅の魅力を求めているのである。

元旦にアマラタシ公園から旅立ったアッギエーエは、北インドの一番大きな市場であるアムリトサルに着いた。そこでアッギエーエは自分の生涯を振り返る。かつてイギリス植民地からインドを独立させるために、この町で銃を修理する工場を作ろうとしていた。アッギエーエは当時、モハンマド・バックスという偽名でこの町に住んでいた。けれども、今日ではアッギエーエはイギリスの軍人として旅をしている。自身の人生の変転にアッギエーエは、人間はこの世界を舞台とする人形劇の一つの人形のように、人間自身には力がない、という嘆きを描いている。

〈ヒンディー語〉

हमारे काम न अपने काम नहीं हम, जो हम ज्ञात; अरे निज छाया में उपनाम
छिपे है हम अपरूप; गवाने आये है अज्ञात गंवा कर पाते स्वीय-स्वरूप!
“अरे यायावर रहेगा याद”, पेज 40

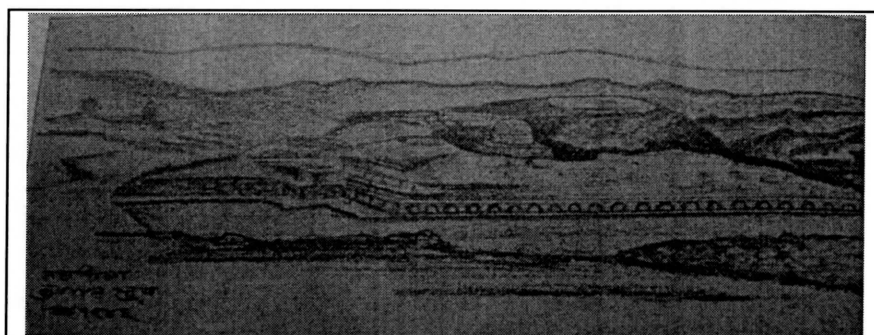
〈訳〉

我々の行いは我々の行いではない。我々は、我々のことを知らない。
我々は影に名前を付けられているだけである。我々の中にはそれを信じさせるものがある。我々は、それを捨てることで。本当の自分を見つけていく。

『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』、ページ40

先に進んだアッギエーエはラホール³⁵という町に着いた。元々、ラホールはインドのパリとも呼ばれた歴史のある町であった。しかし、当時のラホールは独立運動の激化によって、戦火に巻き込まれ、荒廃していた。美しい街並みのレンガの一つ一つが焼けて黒くなっていた。アッギエーエはこの町の悲惨な様子に心を痛め、多くを描写することは出来なかった。パンジャーブ州にあるタキシラは紀元前6世紀ガンダーラ時代に始まる遺構である。ヒन्दゥー教及び仏教における文明や文化などの中心地として重要な役割を果たしてきた。

(タキシラ) →
(本作から取った写真)



タキシラは歴史的に三つの重要な交易路が交差する場所に位置していた。一つはマガダ

³⁵ 現在、ラホールという町はパキスタン領にある。

国の首都パータリプトラ³⁶からの道であり、もう一つはバクトリア³⁷やペシヤールといった北西から続く道、最後の一つがマーンセヘラーを経由してシルクロードへとつながる道である。

アッギューエはタキシラからマラカンドの方に向けて出発した。この地域では8世紀からパシュトゥーン人の支配が始まり、11世紀の初め頃にマフムード・ガズナヴィ³⁸がこの地域をヒンドゥー教の王から勝ち取った。

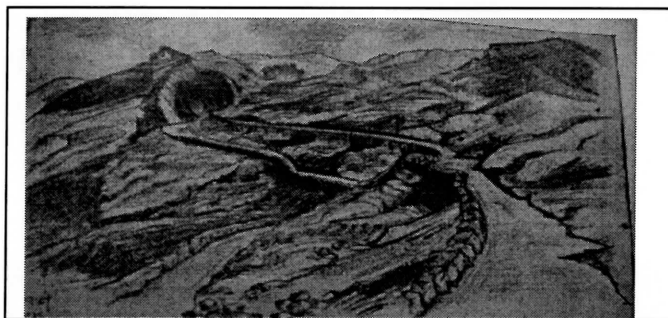
(タキシラの遺跡ブッダーの妻が馬を抱いて泣く場面)
(本作から取った写真)



アッギューエは仏教の遺跡についても記録している。特に、出家した夫が皇帝に馬を返すのを見て泣くブッダーの妻の像に注目している。

タキシラとマラカンドを経てアッギューエはカイバルに到着した。

(カイバル・パース)
(本作から取った写真)



カイバルはインド大陸の門と言われ、アーリア人はこの門を通してインドに辿り着いた。後に、ギリシャ人、フン族、クシャーナ帝国の民、アラブ人、モンゴル人、トルコ人などもこの地域を通ったことがある。昔からこの門が通商行路として使われ、現在に至っても中央アジアを繋ぐ重要な行路として利用されている。

アッギューエは、最終的にインドの国境に到達した。トルカームと言われるこの国境の周辺の景色をしばらくの間じっくり見ていると、高く黒い山に目が留まった。この黒い山はインドを守護しているように見えた。

その後、トルカームから乗っていたトラックを引き返し、帰路に着いた。

³⁶ 現在ビーハル州の首都

³⁷ 歴史家によると初期の人類が居住した場所

³⁸ 生没は970年生まれで1030年没

第二部となっている第二行程はラホールからインドの北側にあるカシミールの方に進むものであった。この方向へは、トラック以外の様々な移動法を利用した。アッギューエのこの旅には科学者も同行し、彼はある科学実験を行うことを目的にしていた。ラホールからバスでシュリーナガルに向った。この町はアッギューエが子供時代を過ごした場所で、ジェーラム川の近くで友達と一緒に遊んだり、近くにある色々な果樹園から果物などを盗んだりしたことが思い出された。

近傍には女性詩人である女王ザエブン・ニシャ³⁹ (1638年～1702年) のパリ・マハル (訳: 妖精城) と呼ばれる城があった。当時は、城内に小川のような水路が流れていたが、今では乾いた水路の跡しか残されていない。もしも、水路に囲まれた美しい城を見なければ自分で大量の水を持っていかないといけない。

アッギューエは没落した城を見て心を痛めて、ザエブン・ニシャが詠んだ詩を次のように引用している。

その詩は次のようである。

〈ヒンディー語〉

हमदमे गर नेस्त ऐ दिल, रोज़े-मेहनतागो म बाश	यूनिसे ज़िन्दानिया रा बहतर अज़ दीवार नेस्त!
लाज़्ज़ते-दर्दे-मुहब्बत रा ज़िबेदरदां मयुर्स	कदरे-सेहतारा नदानद हर कि औ बीमार नेस्त!
जादमे दरदैमो अज़ खूने जिगर परवरदा ऐम-	कोह हा-ए-गम अगर आयद मरा आज़ार नेस्त!
	“अरे यायावर रहेगा याद” पेज 84

〈訳〉

私に仲間がいなかったとしても、私の心は傷つかない。

檻の中の仲間はその壁以外に誰もいない。

愛の痛みの楽しさを、痛みの分からない人に聞くことはなく

健康の価値が分からないような人には、病気がないのと同じように。

私達は痛みによって生まれ、心から血がしたたるような苦しみの中で育てられたのだから。

山のような痛みが来たとしても、恐れることはないでしょう。

『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』、ページ 84

ここからアッギューエは車に乗り、ソーピアという町へ進んだ。けれども、ソーピアまでの道のりで、道路の浸水によって、車は橋の上に閉じこめられてしまった。そこから先は馬を貸りて、旅を進めていった。馬を走らせたアッギューエは、草原や川を抜けて松の森に着いた。森の前の空き地で、馬を休ませた。

この森から少し離れているところに、滝があった。この美しい滝は有名だったので同行者

³⁹ ザエブン・ニシャはムガル帝国の第6皇帝であるアウラングゼーブの長女であり、マクフィ (訳: 隠し) という詩号で詩を執筆していた。人生の最後は、幽閉されて過ごした

のラハマトを連れて見に行つた。40 フィートから 50 フィートの高さの滝は満々と水をたたえていて、底には白い岩が沈んでいた。紅茶を飲みながら、美しい景色を眺めていると、流れる水はミルクのようだった。弾ける泡が森に響いて、音楽的に聞こえていた。

時間はすぐに過ぎてしまった。帰る時には、何度も振り返り、再び訪れることを誓った。

日が暮れる頃にクングワタンに着いた。雨が少し降っていたので、近くにある木造の家で休むことにした。夕日で石は赤く染まり、緑の松の木は黒い影になっていた。このような風景を見てアग्ギエーエは次のような文章と詩を詠んだ。

〈ヒンディー語〉

「हम जानते थे की कल फिर वैसा ही दिन होगा, किन्तु फिर भी साँझ की रंगीनी के साथ उदासी क्यों आती है, क्या इस लिए की वह रंगीनी अपनी असारता का भी बोध लाती है

निशा के बाद उषा है, किन्तु देख बुझता रवि का आलोक
अकारण हो कर सहसा मौन ज्योति को देते विदा सशोक...

“अरे यायावर रहेगा याद”पेज107

〈訳〉

「我々は明日も同じような日が出て来ることを知っているが、夜になるとなぜ寂しさが近づいてくるのだろうか？夜は空虚さももたらすのであろうか

夜の後は、日が昇るが 太陽を沈むのを見て
理由もなく突然黙り込み 光を悲しげに見送るのだ。

『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』、ページ 107

アग्ギエーエは旅を続け、草原を歩き、美しい風景を見ながら、道中の山を登ることにした。1100 フィートを登ったところで休憩することにして、荷物を降ろして大きな石の上に座り込んだ。その時、近くの大きな石と小さい石の間に残雪があった。さらによく見ると、その中に青い花が咲いていた。手を伸ばして摘んで見ると、その青い花はケシの花だった。高山の雪の中でこの花を見つけた人は幸運だと言われている。石と雪から芽吹くのは、この柔らかくて優しい花にとっては大変なことだろう。こうした場所でこの花を目にすることは珍しいため、花を見つけることが幸運の象徴となっている。けれども、その幸運は誰のものだろう？ アग्ギエーエは次の言葉で自分の感情を伝えようとした。

〈ヒンディー語〉

「चट्टानों में भटकते हुए सहसा देखा, एक गुहा के भीतर जमी बर्फ के परे से झाँक कर नील पोस्त का फुल मुस्करा रहा है/ मैंने प्रसन्न हो कर कहा “अहोभाग्य! यह शुभ फुल मुझे दिखा/” और लपक कर उसे तोड़ लिया/

फुल ने सिर झुका कर, आह भरते हुए कहा, “ठीक है, जो मुझे पाता है उस का भाग्योदय होता है, किन्तु मैं जब पाया जाता हूँ तो मेरी मृत्यु हो जाती है/”

“अरे यायावर रहेगा याद”पेज111

〈訳〉

「岩山を放浪している時、突然、雪が積もっている空洞の中から覗いている青いケシの花が、笑みを浮かべているのを見た。私は嬉しくなって「祝福だ」と言った。「この花は私に姿を見せた。」そして、すぐ手を伸ばして摘んだ。花は頭を下げ、ため息をついて言った。「まあ、私を見つけた人には幸運だが、私は死ぬことになる」

『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』、ページ 111

ある山の近くに池があって、アッギエーエの一行はそこで泊まることにした。いくつかの科学的な実験を行ってから、雪が降り始める前の9月3日に帰った。

旅の第三行程は、本作品で第三部となっている。この旅を始めるにあたり、夜の11時頃に、アッギエーエはラホールから電車に乗った。パターンコート・カーンガラなどを經由して、インド北部の避暑地として知られているクッルー・マナーリに向かう旅であった。

ジョグンダール・ナガールという町を出発すると、松の木が見えてきて、アッギエーエの心をいかにも喜ばせた。マンディーという所に着くと、自分の荷物を背負い、木造二階建てのホテルの二階に宿泊することにした。

宿の窓を開いてみると、正面に古い王族の城の跡が見えていた。翌日、旅を進めて、ベヤス川に作られた吊橋を渡って、クッルーに着いた。クッルーはヒンドゥー教の古い町で、無数の神々の偶像があると言われている。ベヤス川の辺りにはりんご、梨、アプリコット、モモなどの様々な種類の果物の木が並んでいて、美しい風景を作っていた。辺りには鱒を釣るイギリス人の姿も見かけた。

旅を続け、カラートという所を通過してマナーリに着いた。カラートでは硫黄などが含まれている温泉があるが、よく管理されていないので村の女性が温泉を使って洗濯しているのを見かける。

マナーリにはムナル（訳：ニジキジ）という美しい鳥が沢山生息しているので、ムナル鳥の名前からその土地の名前がマナーリと名付けた。

加えて、マナーリはインド全体でも果物の産地として有名である。ここで採れるりんごには独特な味や香りがある、その味わいはまるで詩のような韻律を奏でるように、アッギエーエには感じられた。当時、日本の柿も栽培されていたのだが、「いつか日本の柿よりも良いものが採れるようになるだろう」という噂をアッギエーエは耳にしている。

宿泊したのは、マナーリのダーナの壮大な美しい風景の中にある小さな宿であった。アッギエーエは、素晴らしい風景を眺めたり、遠くまで広がっている雲を見たり、荘厳な松の木を見入り、外で働いている人々を見たり、宿の外壁を見たりして過ごした。その瞬間ごとに、魂には深い印象が刻まれた。

第四部となっている第四行程は第三行程の続きである。マナーリに滞在していた時のある日、一日中曇っていたが、雨は降らなかったため、アッギエーエはオーバーコートを着て、

東の遊歩道に出かけた。マナーリの村を通過して山の方向に進んでいくと、突然静寂に包まれた。人の声もせず、鳥の声も聞こえず、滝の音すらもなくなっていた。気付いたらもう日が暮れていて、村からかなり離れているところにいたのである。早く帰らなければならないと思い、引き返し、村に着くころにはすっかり暗くなっていた。時折、村人の家から聞こえる笑い声の他には、アッギューエの石を踏む足音だけが響いていた。

アッギューエが村に入ると家々から男たちが出てきて、何か妙なことを呟いていた。その言葉の意味がよく分からなくて、無視して自分の小屋に戻った。ドアを閉じてその理由を考え始めたが、やはりよく分からないままだった。深夜になると外から石を投げってくる音が聞こえた。

翌朝、家主に話してみると、顛末が分かってきた。以前、この小屋に泊まった人が、村の女性たちに不埒な行為に及んだ事件があったのである。アッギューエは村長と村人に会って、自己紹介をした。家に戻ってくると、村の少年が蜂蜜、かぼちゃ、苦瓜などを持ってきた。村人の歓待の印と知れた。アッギューエはその後、夜に外出するのを止めることにした。

今度は、マナーリからロフターングに旅立った。ロフターングは死の谷として有名であった。ポニーに乗って、美しい滝を眺めたり、ベヤス川の波で刻み込んだ山を見たり、松やオークの森や仏教の寺などを見たり、雨にも降られたりしているうちに、ロフターングの近くのラフラに着いた。

ロフターンの日の出は素晴らしいことで有名だったので、アッギューエは、翌朝、夜明け前に出かけることを決めた。午前3時に起きると、外は非常に寒かった。11000フィートの山を登ると、氷の橋が出来ていて、その下には水が流れていた。この橋を渡った後は、もう先に進むのが難しい道が続いた。ようやく山の頂上に着くと、既に昼間になっていた。横になって、日差しを浴びて体を温めようとした。その時、ロフターングの有名な風が吹き始めた。ロフターングはこの寒風で死の谷として知られていたのだ。

アッギューエは身体を起こすことが出来なくなった。体は冷えきり、眩暈は止らなかった。何時間も動くことが出来ないまま、日が傾いてきた。アッギューエはこのままでは日没になるだろうと思った。もう一回起きようとしたが、起きられなかった。それで、アッギューエはもう帰れないと観念した。こんな時間には誰もこの辺りに来ることはないだろうし、このままでは一晩を生きたまま過ごすことができないだろうと目を閉じて考えていた。

4時ごろ、朦朧とした意識に突然誰かの声が聞こえてきた。アッギューエは力を振り絞って、一度は立ち上がったがまた倒れてしまった。けれども、幸いなことに、その人は、それでアッギューエの姿に気付くことができた。さらに幸運なことにはその人は外科医でアッギューエを蘇生させることができた。

死に直面しながらも生き残ることが出来たということは、アッギューエにとって大きな経験であった。

第五部に描かれた第五行程の旅では、アッギューエはインドの西側にあるエローラの方に進んだ。ここにある石窟群をアッギューエは三つの種類に分けた。一つ目は、南側にある12箇所のお教の洞窟である。ここにある仏像は雄大で、外光のことも考えられて彫られた仏像が素晴らしい眺めを見せていた。二つ目は、17箇所のヒンドゥー教のブラフマン洞窟で、残りがジャイナ教の洞窟である。ここにある偶像は、どれもが素晴らしい出来栄の彫刻である。

エローラはアウランガーバードの郊外にある。アウランガーバードはムガル帝国の第6代皇帝であるアウラングゼーブ⁴⁰の名前を冠してその名が付けられた。この近くにクルダバード（意味は天国の郷）というところがあって、アウラングゼーブ王の質素な墓がある。

アッギューエはアウラングゼーブ王の特徴を、信仰に篤く敬虔であり、王族でありながら自身も労作⁴¹に従事していたと書いている。そして、本作で次のように語った。

〈ヒンディー語〉

「औरंगाबाद-जैसाकी नाम से ही प्रकट है-औरंगजेबने बसाया था/ खुल्दाबाद भी उसी की कृति है/ खुल्दाबाद के अर्थ है 'स्वर्ग की बस्ती' / न जाने क्या सोच कर औरंगजेब उस स्थल को यह नाम दिया होगा, पर इतिहास ने उसे एक व्यंग- प्रतिहिंसा-जर्जर शरीरों को वहीं मिट्टी मिली - अपने ही रचे हुए स्वर्ग में सब मिट्टी हो गये/」 “अरे यायावर रहेगा याद” पेज 187

〈訳〉

「アウラングゼーブは自分の名前を冠して町の名前をアウランガーバードと呼び、人々が移住したところをクラダ・バードと呼んだ。クラダ・バードの意味は「天国の街」である。アウラングゼーブがなぜこの場所にこの名前を付けたのか分からないが、すべての栄華が歴史になり、彼が天国の街と呼んだ都はもう滅びて土になっている。」

『アレ・ヤヤフル・ラヘガ・ヤド』 ページ 187

本作で第六部となっているアッギューエの第六行程の旅は、東インドのアッサム州の奥の旅で、次のように語られている。サフランの花が咲いていて、花びらが風で吹かれていたので周りの丘まで香りが漂っていた。朝の3時に出かけ、7時にブラマプトラ川の辺りについた。船員は熱心に川で船を漕ぎ始めた。船は川の流れに沿って動いていた。その時、向かい風が下流から吹いてきて、船は突然止まってしまった。何もできず、船員は愛想笑いを浮かべた。

三時間後、川の土手に着き、そこから牛車で村の方に進んだ。そのまま夜の11時になり、空には星が光っていた。御者も何曲か歌っているうちに居眠りを始めた。アッギューエも居眠りして旅を続けた。

目的地に着いて、その翌朝、バスに乗り、その後にもた、船に乗った。アッギューエが向

⁴⁰ アウラングゼーブの生涯は1618年～1707年までである。

⁴¹ アウラングゼーブ王は帽子を作ったり、イスラム教の聖書のクルアーンを書くことで、自分の生活を営んでいた。自分も墓のこの仕事で儲けたお金で作ったのである

かっていたのは、マジョーリという島の村だった。この独特なブラマプトラ川にある島は、70 マイルの長さで 10 マイルの幅を持っていて、アッギューエは世界のどこにもこのような川にある島はないと思っていた。

マジョーリの高地では竹と藁で作られた住民の家が並んでおり、裕福な家は土で作られている。高地では道路が敷設されていて、洪水の時には村人は自分の牛やヤギなどを連れて、その道路に避難する。さらに虎、きつね、ジャッカル、蛇などの野生動物も、森からその道路に逃げてくる。この野生動物と家畜の群れを、村人たちは道路の上に高い足場を作って、その上から見下ろすことになる。洪水が終わると、人々は自分の家へ、家畜はフェンスの中へ、虎は洞穴へ、蛇は塚へ戻る。このように島村の生活は営まれている。

アッギューエはマジョーリから象に乗って、アウニヤティという村の方に出かけていった。村に着くとそこの村のゴサーイ（村長で宗教師のこと）と会った。三百人程の生徒を受け持っているゴサーイは、アッギューエとサンスクリット語を混ぜたヒンディー語で話し、世界の現状について生徒たちに講義するように依頼した。アッギューエは生徒たちにこの話題について、聞きたいことがあれば答えると言って、話し始めた。講義が終わった後、皆で土器で食事をし、晩になる前に象に乗って帰った。

ダクシナパットという僻地への旅に出ようと決めた。ダクシナパットはまだ近代化されていなかった。アッギューエは 10 マイルのこの旅に朝早くから大きな象に乗って出かけた。道の途中で背の高い草原があって、象に座っていてもアッギューエは首だけしか出すことができなかった。

突然、象の足の近くに蛇が出てきたことで、象は暴走を始めた。象使いも抑えることができず、象使いとアッギューエは象の上に座ったままであったが、30 分後には収まった。その後、アッギューエは旅を続け、サラソウジュ、竹林を抜けて、直接ダクシナパットのゴサーイのところに着いた。

アッギューエはゴサーイと食事をしながら、話し合った。このゴサーイは 50 人の生徒を受け持っていた。ゴサーイは、外の人にはダクシナパットの土地と文化にあまり興味を持たないと悲しそうに打ち明けた。そこで、アッギューエは、この辺りの風景を見たり文化を学ぶために来たのだと答えた。帰りにゴサーイは土産をくれた。

旅を先に進めて、グラムラという村に行こうとしたが、引き止める声もあった。独立運動に参加したことから、1942 年にこの村のゴサーイが拘束されたからである。けれども、アッギューエはグラムラに行き、友好的に村人と話し合った。そして、その村が直面している困難を解決するように約束した。

紀行文の『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』の最後の第七部はアッギューエが旅に出ることになった動機について語るものである。アッギューエには旅への興味が子供時代からあった。アッギューエは旅に出ない時、地図を見ながら雪原、砂漠、森、海、島に自分がい

る想像をしていた。そして、大人になってからは旅に出ようと決心したら、それをかならず完遂した。

ある時、アホム族の都ソナリからトラックでシワサガルに行くことを決心した。道路には水が流れ込んでいたが、無視して先に進んだ。やがて道路は完全に浸水してしまった。どこに道路があるか分からなくなってしまい、トラックをUターンすることも出来なかった。最終的に3マイルぐらいトラックをバックのまままで走らせて戻った。それでも、行くのを諦めず、川の辺りにあった船にトラックを載せ、川を渡ろうとした。けれども、川を渡った後、川岸でトラックは滑り、半分ほど水に沈んだが、なんとかして引き上げた。

〈ヒンディー語〉

「वास्तव में जितनी यात्राएं स्थूल पैरों से करता हूँ, उस से ज्यादा कल्पना के चरणों से करता हूँ/ एक जीवन-दर्शन का निचोड़ है/ रमता राम इसलिए कहते हैं कि जो रमता नहीं वह राम नहीं/ टिकना तो मौत है」
“अरे यायावर रहेगा याद”पेज 228

〈訳〉

「実際に全ての旅は身体の手だけでなく、それ以上に想像の手で行ったのであった。これは、人生の哲学であって、動くことこそが人が生きるということであり、一ヶ所に留まり動かないことは死に等しい。」
『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤド』 ページ 228

アッギエーエは上記の文で紀行文の『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤド』を締め括っている。

(二)、アッギエーエの紀行文の『エク・ブンド・サフサ・ウチリ』

アッギエーエのもう一つの紀行文がヨーロッパでの旅行を描いた『エク・ブンド・サフサ・ウチリ (訳: 急に飛んだ一滴)』である。この作品ではヨーロッパの先進的な伝統、文化、文学、歴史などを、インド人の視点で捉えて執筆した。1960年に出版された本作は、当時の進歩主義時代と呼ばれていたインドの文壇にアッギエーエの敏感な思想による新鮮な影響を与えた。

『エク・ブンド・サフサ・ウチリ』は、普通の作家がするような一定した形式で作品を仕上げるのではなく、様々な表現手法を次々に切り替えながら執筆された。具体的には、戯曲、書簡体、日記といった形式である。これからの形式が並存することによって、この作品は多角的な視野を形成している。韻文と散文で執筆された本作品には21章があり、20篇の詩も収録されている。

アッギエーエは紀行文を執筆するに当たり、序文に詩を詠んでいる。

〈ヒンディー語〉

मैंने देखा:
रँगी गयी क्षण-भर

एक बूंद सहसा
ढलते सूरज की आग से/

उछली सागर के झाग से-
-मुझको दीख गया:

हर आलोक-छुआ अपनापन है उन्मोचन

नश्वरता के दाग से
“एक बूंद सहसा उछली” भूमिका

〈訳〉

私は見た。海の泡から急に飛んだ一滴
沈む太陽の日差しで塗り潰された瞬間、私に見られた。
すべての輝きと親愛の感覚は無常の染みから開放された。

『エク・ボンド・サフサ・ウチリ』序文

アッギエーエの旅の記録は、イタリアの首都ローマへ向かう飛行機の機上から始まった。ローマの晴れている空から見下ろす町の上には木綿のような霧が広がっていた。それを見て、次の詩を詠んだ。

〈ヒンディー語〉

यह ऊपर आकाश नहीं, है	रूपहीन आलोक-मात्र/ हम अचल-पंख
तिरते जाते हैं	भार-मुक्त/
नीचे यह ताजी धुनी रुई की उजली	बादल-सेज बिछी है
स्वप्न-मसृणः	या यहाँ हमीं अपना सपना है?

“एक बूंद सहसा उछली” पेज 17

〈訳〉

この上には空はない。形あるものはなく、光だけである。
我々は動かない翼で飛んでいく。
無負荷、下に新鮮な白い木綿のような雲の層が広がっている。
平滑化した夢だろうか、それとも我々自身が夢なのだろうか。

『エク・ボンド・サフサ・ウチリ』ページ 17

飛行機は、ローマのチャンピーノ空港に到着する。インドから離陸して22時間も経っていたが、ローマではまだ夜だった。バスで街に入ると、街灯でローマは昼間とは違った雰囲気であった。街の真ん中にあるトレヴィの泉の前を通った。トレヴィの泉にコインを投げて人々は願い事を言うのだが、大抵の観光客はローマに再訪することを願っているのだろう。ちなみに、デリーあるハリヤ・ピールと似ている。古代から現代までの伝統を持つローマでは様々な時代の様式の建物が並んでいて異なった様式が並立していた。道路や、街道の途中にある警察が立つ足場、その周りに植えられている花などに愛着を覚えた。

アッギエーエは街を歩いて見るのが好きだったので、ローマの下町を歩いたり、歩いている人々の真剣な顔を見たりした。その感動を次の詩で示した。

〈ヒンディー語〉

भीड़ों में	जब-जब जिस-जिसने आँखे मिलती है	वह सहसा दिख जाता है
मानवः	अंगारे सा, भगवान-सा	अकेला/

“एक बूंद सहसा उछली” पेज 19

〈訳〉

人群れの中、視線を合わせるたびに、急に見える彼は人間だ。
燠のような、偉大な一人ぼっちの人間だ。

『エク・ボンド・サフサ・ウチリ』 ページ 19

人々と視線を合わせても相手のことがよく分からないアッギューエは、更に次の詩を詠む。

〈ヒンディー語〉

खड़ा मिलेगा वहाँ सामने तुमको
अनपेक्षित प्रतिरूप तुम्हारा नर, जिसकी अनङ्गिप आँखों में नारायण की व्यथा भरी है!
“एक बूंद सहसा उछली” पेज 19

〈訳〉

あなたの前に立っている、
それは予想外のあなたの自身、その男の目は富を求めて痛みに満ちている。

『エク・ボンド・サフサ・ウチリ』 ページ 19

アッギューエは市内を歩いて見た歴史的な名所や近代的な人々の忙しさ、街の雰囲気までを紀行文に描こうとした。技術が発展しているイタリアでは、人々の生活のテンポが変わり、朝早くから夜遅くまで働き続けている。人間は努力すればする程進歩するという幻想に追いたてられ、彼らは一生終わりのない道を歩くことになる。

一方で、アッギューエはイタリアでの楽しい体験も書いている。

イタリア人はいつも上機嫌で普通の会話でも愉快的な言い回しをする。ある人は「今日は月曜日ですね」と他の人に聞かれると、「はい、今日は一日中月曜日です。」と答える。

別の場面では、アッギューエは警察官に「オールド・イタリアへ行きたい」と道を尋ねた。すると、警察官は「イタリア全体がオールドです」と答えた。

このような体験を語りながら、アッギューエはローマが主に七つの丘の上にある都市だと主張し、インドの首都であるデリーを連想している。実は、デリーにもかつては七つの丘があったのだった。しかし、人が住み始める時に丘を崩して平地にしてしまった。アッギューエはそのことを悔しがっていた。更に、テヴェレ川に沿っているローマを見てアッギューエは、ベナレス⁴²を思い出した。

ローマを出発し、アッギューエはフィレンツェに到着した。フィレンツェは歴史ある街で、文化的にも重要な貢献をした。レオナルド・ダ・ヴィンチ、ダンテ、ガリレオらの出生地としても有名である。中世期のフィレンツェは精神的自立や商業富化の中心地であり、特に 14 世紀～15 世紀にはその風潮は最高潮となった。現在も残されている城や教会、博物館はかつての繁栄を思い起こさせる。フィレンツェのかつての栄耀は一睡の夢のようなもので、現代では当時の跡だけが残る。そこで、アッギューエは次の詩で想いを語っている〈ヒンディー語〉

⁴² ベナレスはガンジス川の辺にあり、ヒन्दウー教の聖地

दृश्य के भीतर से सहसा कुछ उमड़कर बोला: सुन्दर के सम्मुख यह तुम्हारी जो उदासी है वह क्या केवल रूप, रूप, रूप की प्यासी है/ जिसने बस रूप देखा है उसने बस-भले ही कितनी भी उत्कट लालसा से केवल कुछ चाहा है जिसने पर दिया अपना है दान उसने अपने को, अपने साथ सबको, अपनी सर्वमयता को निभाना है

“एक बूंद सहसा उछली” पेज 39

(訳)

風景の向こうから突然何か沸きあがって語り掛けてきた。

美しさを前にしてのあなたの悲しみは、見た目だけを渴望したせいだろうか？

見た目だけを望んだものは、どんなに情熱的に見えても、たいしたことはない。

自分自身を他の誰かに譲り渡すことで、自他を含めた完全へと近づくのだ。

『エク・ボンド・サフサ・ウチリ』ページ 39

アッギューエは旅を続けて、ペルージャ県の丘陵上に築かれた城砦都市であるアッシジに着いた。12世紀以来建てられた家の様式は統一されていて時代の変化が見られない。海上から1400フィートに位置するアッシジからはティベル川やトピノ川の溪谷が見られる。アッシジのフランチェスコに敬意を表して建設したフランチェスコ聖堂とその関連する修道院などの施設群は荘厳であった。

イタリアの社会、歴史、文化、人々の暮らし方や生活の仕方などをインドと比較しながら体験したアッギューエは、ギリシャはヨーロッパ文明の父であり、イタリアはヨーロッパ文明の母であると執筆している。

スイスに着いたアッギューエは風光明媚な景色を語った。スイスは山岳地帯なので、ヨーロッパの屋根とも言われるが、ヒマラヤ山脈と比べれば大したことはない。あるイギリス人の教師はヒマラヤとヨーロッパの山を比較して、ヨーロッパの山をにきびのようだと言いつつ放ったものである。

なお、別の意味でスイスはヨーロッパの屋根である。インドでは屋根には貯水タンクを置いている。屋根は水源としての意味もあるのである。スイスから流れ出た水は川となり、ヨーロッパのいくつかの国に流れていく。ライン川、ローヌ川、ポー川はスイスが源流であり、ドイツ、フランス、イタリア、オーストリアなどを通して流れる。

そうと言っても、スイスは川の国ではなく、湖の国家である。ローザンヌ市のレマン湖で見られる日没は非常に美しい。バイロンの作品である『シヨンの囚人』の詩で語られてさらによく知られるようになった。

スイスは多言語国家で北西はドイツ語、西と南西はフランス語、南東はイタリア語が使われている。しかし、三つの言語の間に文化的、思想的、風習的な関係が相互に結び付いている。この例から、多種多様の言語が混在しているインドは多くを学ぶことが出来る。

しかし、アッギューエの考えでは、一つの言語に斟酌できずに創造的な文学作品を作ることは出来ない。なぜなら、言語は文化の命だからである。おそらく、そうした要因でスイス出身の優れた文学者の数は少ないのである。

ベルも汽笛も鳴らなかったが、電車は動き始めていた。あわてて電車に乗ると、既に大分スピードが出ていた。アッギエーエはジュネーヴを出発して思想家・哲学者であるカール・ヤスパースと会うためにバーゼルに向かっていた。

カール・ヤスパースとの会談では、東洋と西洋をはじめ、インドとヨーロッパの思考、文化・文学の類似点や相違点などについての問答があった。ヤスパースにヨーロッパに来た理由を聞かれたとき、アッギエーエは「ヨーロッパの文化と我々の文化にいくつかの似ている点があると思われるので、それを認識するために来た」と答えた。話を先に続けて、アッギエーエは西洋と東洋、その中間としてのインドという三つの大きな文化が存在していると語った。それは、現代の西洋では近代産業文明が中心になっているが、その根底には宗教文化が存在している。中国では宗教の重要性がなく、世俗的な価値観が中心となっている。地理的に双方の中間にある我々インドの文化は、信仰と世俗の両方の要素がある。そして、インドとヨーロッパの理想的な芸術にも違いがある。例えば、自分の困難な体験を書き残す場合、インドではすべてが終わってから文章に残すが、ヨーロッパでは体験中にそれを書く。

ヤスパースと有意義的な論議が終わった後、アッギエーエはジュネーヴに戻った。

アッギエーエは旅を続けてパリに着いた。パリはヨーロッパで最も美しい街の一つであり、前世紀からヨーロッパの文化・文学においてパリが中心的な役割を果たしていた。カフェも文化派、文学派などに別れており、髭を生やして仕事をしない若者もいる一方、必死に詩を執筆している詩人も見かける。

パリを二分するセーヌ川の河岸を散歩するのはパリの主要な魅力の一つである。そこでは、自然の美や愛の生活を営む男女を見ることができる。けれども、一見したところ、それは恋愛生活ではなく、陽気生活というべきだとアッギエーエは主張している。

これ以外にも、当時の近代文明社会では、全ての人は群衆の中でも孤独であるとアッギエーエは考え、次の詩を詠んだ。

〈ヒンディー語〉

एक मृषा जिसमें सब डूबे हुए है
मारते है, मरते है

क्योंकि एक सत्य जिससे सब ऊबे हुए है,
क्योंकि जीवन से डरते है

“एक बूंद सहसा उछली” पेज 68

〈訳〉

すべてが無益に沈んでいる。

なぜなら、皆が真実から離れているからである。

殺したり、死んだりする。

なぜなら、人生を怖がっているからである。

『エク・ボンド・サフサ・ウチリ』 ページ 68

線路はパリからリヨン市までローヌ川に沿って走る。自然の美しいローヌ川は南フランスの風景をより美しくし、河岸のブドウ園もよく知られている。アッギエーエはヨン川を沿

ってエヴェローンまで路面電車で行き、そこから村人が果物、野菜、魚、殺虫剤などを運ぶトラックでピエール・ムアールの近くに降りた。そこから歩いて、ピエール・ムアールの石庵があった森に着いた。その森に入ると、驚くほどに、平安や崇敬の念が沸き起こるのであった。

そして、旅人であるアッギューエは次の詩を詠む。

〈ヒンディー語〉

पर सबसे अधिक मैं
क्योंकि वही मुझे बतलाता है कि मैं कौन हूँ
जो मौन, अपरिवर्त है, अपौरुषेय है,

वन के सन्नाटे के साथ मौन हूँ, मौन हूँ
जोड़ता है मुझको विराट से
जो सबको समोता है

“एक बूंद सहसा उछली” पेज 80

〈訳〉

しかし私は森の沈黙のように黙り込んでいる……………

なぜなら、それは私が何者であることを知らせて、

巨大なものと結び付ける。

その沈黙は、不変の奇跡、

それはすべてを飲み込む。

『エク・ボンド・サフサ・ウチリ』 ページ 80

海底や川の土、砂などで国を作られるだろうか？ アッギューエは驚嘆すべきこととしてオランダのことをそのように伝えている。海を埋め立てて国土を作り、その上では農業も行われている。アムステルダムからヘーグに至る道の両側にはチューリップ、ユリ、スイセン、クロッカスなどの花が咲いており、アッギューエの目を楽しました。これは、オランダ人の絶え間ない重労働の成果である。オランダの気質は国土の維持や戦乱によって、形作られた。アッギューエは旅を続けて、オランダに行き、オランダの社会の特徴や体験したことなどを紀行文に執筆している。

アッギューエは東オランダのユニデーという町の大学で行われる『機械化時代と現代文明の傾向』というセミナーに出席し、それからヴォランダームにある小さく美しい村へ観光に出かけた。バラの花で飾った村では、伝統的な服を着ている男女の嬉しそうな顔が見られた。けれども、実はその男女は村人ではなくて、外国から来た観光客であり、村では伝統衣装を貸し出して賃金を取っていることを知ってアッギューエは非常に悲しくなった。都市や産業文化はヨーロッパ全体で普及し、村で営まれていた民族文化はその役目を終えて、現代では観光資源となってしまっている。伝統文化を売り物にする習慣はアッギューエにとって耐え難いことであった。

アッギューエはイギリスのロンドンとエディンバラに旅立った。インド人であるアッギューエはイギリス、特にロンドンについては以前から本などでも読んでいたので、ロンドンの街路の名前も聞きなれないものではなかった。けれども、実際に目で見たロンドンと本で読んだロンドンとは遥かに違っていたという。ローマ、パリのようなヨーロッパの他の美

しい街に比べてロンドンは、あまり美しくなく、不潔で、怠惰な印象の街だったが、妙に馴染みのある街でもあった。それに対してイギリスの郊外の村は美しく多種多様で、一つの村を説明するのに一冊の本になってしまうと思った。

インドが植民地化されたことで、芸術品や考古学的な貴重品はロンドンに持ち去られた。そのためロndonはインドの文化や芸術が豊富な都市でもある。特に、大英博物館やビクトリア&アルバート美術館は世界的にも有名である。

スコットランドの首都であるエディンバラでは世界中の文化の博覧会が行われていた。アッギューエは、デンマークの踊り、アメリカの劇、インド舞踊、日本の演劇や人形浄瑠璃、中国の戯曲などを見た。イギリスで起こった産業革命により南スコットランドでは無差別に工場が建設され、煙が排出され、郊外から来た労働者の住居が並んだ。数百年の伝統は姿を消しつつあった。

アッギューエがイギリスから出した三通の手紙も集録されている。最初の手紙では、シェイクスピアの作である喜劇の『十二夜』と悲劇の『ハムレット』の切符を買うのに苦労したことや劇場がどんなに混んでいたかといったことが書かれている。またロンドンのストで交通に困ったことも書かれていた。

二通目の手紙は湖のことが中心となっている。ガラスメーレ湖、ライダール湖などを初め数多くの湖について書かれている。そして、アッギューエが訪れたワーズ・ワースの家であるダーワ・コテージや、ここで執筆した詩集の『ルーシー』や『ダフォディルズ』などについても手紙では示されている。

三通目の手紙では、イギリスのバースという都市を訪れたことや1世紀頃、ローマの支配下で温泉などが作られたことなどが中心に書かれている。

ウェールズを訪れたアッギューエは、農家の家に泊まり、その近所の少女が歌ったウェールズの民謡を録音した。すると、一人の年配の男性が出てきて、自分の詩を録音してはどうかと勧めたので、アッギューエは彼の詩も録音した。後に、農家の家族にその年配の人はウェールズの国民詩人であるということを知えられた。イギリスではエリザベス女王が、ウェールズで詩人を任命する試験があり、合格した詩人には証明書も与えられるという習慣があったことにアッギューエは驚いた。

ウェールズの旅を続けてアッギューエはアイルランドに着いた。インドの独立運動に参加したアッギューエはアイルランドの革命家の伝記なども読んでいたので、インドにいた時からからアイルランドに行きたいという気持ちを持っていた。アメリカの13人の大統領がアイルランド出身であるし、アメリカの独立を発表した新聞のオーナーのジョン・ダンロップもアイルランドの出だった。この国は独立的な気風の源泉であった。

一方、アイルランドの人々は議論好きで、様々な話題を討論する環境で育てられている。そうはいっても、彼らは気の良い性分で、そのことをアッギューエは紀行文で紹介している。また、アイルランドではおとぎ話が盛んに語り継がれていた。

アビスコへ着くまでに、800マイルの距離を電車で22時間かかるとアッギューエは電車

に乗って考えた。22時間もの間、窓の外を見てばかりもいられないので、スウェーデンについて書かれた何冊かの本を読み始めた。本のページをめくりながら、外の風景を見ているうちに、未明にアビスコに着いた。アビスコからストックホルムに向かった。メーラレン湖の複雑な形はストックホルムに様々な美しい眺めを作っている。また、驚いたことに、スウェーデンのある駅では知らない人に見送ってもらってアッギューエは、スウェーデン人の暖かい心に感動した。

アッギューエは、最初大学の寮に泊まったが、翌日は八つの部屋しかない「作家たちのホテル」と呼ばれるホテルに移動した。移動した理由は、ストックホルムを訪れた作家はこのホテルに泊まる習慣があったからだとして紀行文では説明されている。その泊まったホテルは山の坂の途中にあって、近くには山の麓から200フィートの高さを行き来するための公共リフトがあった。アッギューエは、リフト・オペレーターがリフトを利用する人の顔をじっくり見ていることに気付いた。ある日、女性のリフト・オペレーターにその理由を尋ねると、リフトのプラットホームから飛び降りて自殺する人もいるので乗る人の顔を見ているのだと答えた。その答えは、アッギューエとオペレーターをしばらく沈黙させた。この答えに対して色々な疑問がアッギューエの頭に浮かんだ。

スウェーデンでは夏の日はきわめて長く、冬は終わりがけない夜に家が雪に覆われて他の世界から遮断される。その気候の影響は国民の気質にも見られる。寡黙で孤独を好み、思慮深いといった性格を持ち、他人への干渉を好まない人々である。先進国でよくみられる内向的な性質は自信の喪失に繋がるものである。この傾向はスウェーデンでも見かけるし、当時社会問題となっていた。

アッギューエはスウェーデンで詩会にも参加し、他の言語の詩人と一緒にヒンディー語のいくつかの詩も詠んだ。詩人たちは10年ごとの時代に分けられて、アッギューエは1930年代の詩人だと決められた。紀行文ではアッギューエが詠んだ詩は明示されていないが、ヨーロッパにいる間に執筆した詩をその詩会で詠んだということは記述されている。アッギューエがスウェーデンにある湖の辺で書いた詩を詠んだ時は、スウェーデン人の詩人も同じ湖で執筆した詩をアッギューエに聞かせた。韻律と旋律などがヒンディー語と違っていた。

ヨーロッパに来る前にアッギューエの頭には作家としてのいくつかの疑問があったのだが、満足的な答えはまだ出ていなかった。詩会に参加した時、何人かの詩人がリンドグリーンという非凡な詩人と会うように勧めた。

当たり障りのない雑談の後、リンドグリーンとの本質的な対話が始まった。アッギューエは質問するべきか迷った。しかし結局、好奇心に負けて「詩人や作家としてどのような悩みが最も心配や不安を喚起させるのでしょうか」と質問を投げ掛け、リンドグリーンの顔を真剣に見つめた。このような答えにくい質問に必ずしも回答が得られるとは限らなく、言い訳をつけてこの質問を言い逃れるかもしれないとアッギューエは思っていた。その時のことは、紀行文では次のように描かれている。

〈हिन्दी-एंग्लिश〉

किन्तु लिण्डग्रेन की प्रतिक्रिया मेरे लिए सर्वथा अप्रत्याशित है वह थोड़ी देर अपने गिलास के पास से अपलक आँखों से मेरी ओर देखते रहते हैं/ फिर सहसा गिलास को मेज पर पटकते हुए आगे को झुक आते हैं; उनका चेहरा भी गिलास के तरल पदार्थ सा तमतमा उठता है और रागाविष्ट स्वर में वह पूछते हैं "आप कौन होते हैं ऐसा प्रश्न पूछने वाले? अगर मैं ही आपसे ऐसे सवाल पूछूँ तो क्या आप जवाब देने का साहस करेंगे? अगर मैं ही पूछूँ कि आप मृत्यु से डरते हैं कि नहीं, तो आप सही-सही उत्तर देंगे?"

“एक बूंद सहसा उछली” पेज 169

〈अनुवाद〉

शिकाई, लिण्डग्रेन की प्रतिक्रिया अप्रत्याशित थी। मैंने अपने हाथ में लिए हुए गिलास को मेज पर पटकते हुए आगे की ओर झुक आते हैं; उनका चेहरा भी गिलास के तरल पदार्थ सा तमतमा उठता है और रागाविष्ट स्वर में वह पूछते हैं "आप कौन होते हैं ऐसा प्रश्न पूछने वाले? अगर मैं ही आपसे ऐसे सवाल पूछूँ तो क्या आप जवाब देने का साहस करेंगे? अगर मैं ही पूछूँ कि आप मृत्यु से डरते हैं कि नहीं, तो आप सही-सही उत्तर देंगे?"

『एक बूंद सहसा उछली』 पेज 169

प्रश्नोत्तर में उत्तर नहीं मिला। इस जीवन के अर्थ को समझने के लिए मैंने इस जीवन में प्रश्न पूछने का उद्देश्य था, मृत्यु से डरने का उपाय नहीं है। रात के अंधेरे में, दोस्तों को लेकर मैंने लिण्डग्रेन की प्रतिक्रिया को धन्यवाद दिया।

सूर्योदय के बाद, लिण्डग्रेन की प्रतिक्रिया को धन्यवाद दिया। लिण्डग्रेन की प्रतिक्रिया को धन्यवाद दिया। लिण्डग्रेन की प्रतिक्रिया को धन्यवाद दिया।

टोनेट्सुसुका झील की सतह पर बर्फ गिर रही है, बर्फ गिरने से बर्फ नहीं गिरती। फिर भी, झील की सतह बर्फ से ढकी जाती है, और बर्फ गिरने के समय में फेनोज़िया झील में बर्फ गिरती है। झील के आसपास बर्फ गिरती है, और बर्फ गिरने के समय में फेनोज़िया झील में बर्फ गिरती है।

असह्य को महसूस करने वाला फेनोज़िया, बर्फ गिरने के उदाहरण को उद्धृत कर रहा है।

〈हिन्दी-एंग्लिश〉

झिल्ली का अविरत उल्लास
देता है संकेत कहीं क्या उसे
मृत्यु है कितनी पास

“एक बूंद सहसा उछली” पेज 177

〈訳〉

やがて死ぬ

けしきは見えず

蟬の声

アッギューエは岩に座ったまま雪の下を流れる水をしばらく見ていた。自然の循環は何か異常なことが起きても、結局は変化することなく、元の循環に戻っていく。このような自然の循環が何かに破れるかもしれないという不安をアッギューエは覚えた。そして、その不安は山に積もった雪から感じられたのでアッギューエはその不安は山のものだと考えた。山の静寂はアッギューエの呼び声だったのだ。

アッギューエは山に登ることにした。道に迷っても頂上かふもとの町を目指せば良いと考えていた。道中、枝と枝が絡まっている木々を抜けると、忍耐強い低木が林立し、さらにそこを抜けると草しか生えていなかった。歩いて行くと土に足が沈み込んだ。今は雪が溶けて草が出ているが、少し前までは雪に覆われていたところだった。岩の上には融けかけた雪の水が滴っているが、全部溶ける前に新しい雪が降るだろう。そして、アッギューエは次の詩を詠む。

〈ヒンディー語〉

एक दिन जब सिवा अपनी व्यथा के कुछ याद करने को नहीं होगा क्योंकि कृतियाँ दूसरों के याद करने के लिए हैं एक दिन जब दे न पाया जो, उसी की नोक बेबस सालती रह जाएगी क्योंकि दे पाया अगर कुछ याद उसको आज मैं करता नहीं हूँ और जीवन! शक्ति दो उस दिन न चाहूँ याद करना एक दिन उस दिन जिसे अपनी पराजय भी दे सकूँगा समुद्र, निःसंकोच उसी को अपनी गीत देता हूँ “एक बूंद सहसा उछली” पेज 178

〈訳〉

いつか、自分だけしかこの悲哀を知ることがなくなるだろう？ しかし、他人の作品は忘られることはない。いつか、何も出来なくなって無力になるだろう。しかし、ことをなしたら、その悲哀を私は思い出すことはないだろう？ 生涯！ 力のために、その悲哀を思い出さたくはないか？ いつか、私の敗北は私を海のようにするだろう。その歌を私は詠む。

『エク・ブンド・サフサ・ウッチリ』ページ178

山を下りてホテルに戻ったが、超越的な経験の影響は強く残っていた。25年前の独立運動の最中イギリス軍に拘留されていた時に抱いていた疑問、その疑問を表現するために試行錯誤して詩、小説、戯曲などを生み出してきた。しかしストックホルムでプラットホームを飛び降りて自殺する人や生死の質問に対するスウェーデン人の詩人の予想外の反応は再び同じ質問にもたらした。世捨て人として、誰かの目にも触れることなく死を迎えたら、どのように感じられるだろう？ 死とは人生からの開放であり、至福の瞬間であろうが、その時、人生に対する執着が存在するだろうか？ 人生に執着しない人々ならこの瞬間を分析し、死のこの瞬間は人生の頂上であると考えよう。けれども、死の瞬間だけを取り出して世捨て人はどのように考えるだろうか？ このことについては、常々考えていることであって、そのような世捨て人が無人島やトンネルの中で孤独に死んでいくことを想像した。

しかし、こうした想像は超越的で、この思索の一部分を作品にすることは出来るが、その全貌を語ることは出来ない。これはアッギェーエにとっての旅のようなものであり、同行者はいないのである。

デンマークに到着した。春休みだったので、空いていた大学の寮に泊まった。デンマーク人は活発で社交的である。そして、デンマーク人はハンス・アンデルセンの童話に誇りを持っている。

真夜中にバジャルから電車に乗った。周りを見ると、車内に他の乗客は一人もいなかった。寂しい電車はライン川に沿った線路を走っていた。夜中の空はインドの空と違った感じがした。インドでは、星で満ちて空が美しく見えるが、ヨーロッパでは星は一つ、二つしか見えず、月が見えたとしてもおぼろ月である。

アッギェーエはいつの間にか寝てしまった。目が覚めると、電車はフランクフルトやライン川から離れて西の方に進んでいた。西ドイツの都であるボンに到着したが、ボンは首都のように見えなかった。古い民家を改装したホテルに泊まった。

ボンの伝統的な音楽は、ヨーロッパのクラシック音楽では重要な位置付けである。ボンのホールでは定期的にコンサートが開かれる。ボンはベートーヴェンの出身地でもあって、彼の家と生まれた部屋は当時のままに保存されている。

以上が『エク・ブンド・サフサ・ウチリ』の内容の要約である。イタリアから始まったアッギェーエのヨーロッパの旅の記録は、ドイツで締め括られることになる。アッギェーエはこの旅を通して語ることの人生における意味への疑問などを描いたり、ヨーロッパの自然の中で感じられた無常観を芭蕉の俳句を通じて描写したりしたのである。

『エク・ブンド・サフサ・ウチリ』という紀行文はヒンディー語の読者にとって、アッギェーエがただヨーロッパの文化や習慣、風景をそのまま語った作品というよりも、むしろ過去や現代のヨーロッパ社会をインド社会の文化人という立場から批評した作品であるという意味合いが強い。更に、本作品で学者としてのアッギェーエの成熟した思想や思考もヨーロッパ社会に触れることでより鮮明に執筆されていると読み取ることができる。